堂の縁側に立つて、内部を覗いて見たが、暗くてよく分らなかつた。幼い頃こゝから覗くと古い佛たちが、によき〳〵と立つてるたのを思ひ出した。

佛像よりも、先づ、圓く太い柱なぞが、平城朝後期の代表的特色を浮べて、私の眼に映つた。

二十四

背後から、「わッ」と叫んで、私の腰のところを押したものがあつた。興丸であることは、振り向くまでもなく分つた。

「死骸見にいて叱られた。」と、興丸は歌をうたふやうに言つて、鼻緒の切れかゝつた大人ものの利休下駄のちびたので、三月堂の縁側をカタ〳〵と歩き廻はつた。彼れはこの下駄で足音を忍ばせつゝ、いつの間にか私の後を跟けて來たのである。

「あんなもの、見るんぢやない。」と、私は少し窘める風に言つた。

「見たいなア。」と、駄々を捏ねるやうに言つてから、興丸は少し顔を赧くした。

「興さんは、いつ見に行つたの？　あんな穢らはしいものを。」と、私は赧くなつた興丸の顔を見詰めつゝ言つた。

「いんま。……下から登つたら、警部に叱られた。あの死んだ人、白い綺麗な身體やなア。家の倭文さんと、どつちが綺麗なやろ。」と、興丸はまた、ぼうつと顔を緒く染めた。

「興さんは叱られても、見てたのか。」

「ちいと見てやつた。……あんな畫を見たことがある。大阪の展覽會で、あんな裸體の畫や人形、ドッサリあつた。

「さう、興さんは、いゝ畫だと思つたの？　いゝ彫刻だと思つたの？」

「しやうもない、詰まらん。」

「畫や彫刻が詰まらんのに、眞んものを何故見たがるの。」

私がさう言つて、詰め寄ると、興丸は一層顔の色を赧くして、差し俯向いたが、

「畫を見ても叱らんのに、眞物を見ると、なんで叱るんや。」と、これは辯解でなく、自分の疑問を私に訴へて、解決しようとする風に見えた。

『畫や彫刻は美術だが、眞んものは穢らはしいんだ。』と、私は三月堂の奥に佛像を覗き込まうとしながら言つた。

『そいでも、モデルたら言うて、眞んものから寫して描くんやないか。』

『眞んものゝまゝでは、美術ぢやないが、人間の、……いゝ人間の……えらい人間の頭を通つて來てはじめて、美術になるんだ。』

『さう。……』と言つて、興丸はヂツと考へる風をしてゐたが、動もすれば、彼れの小さな魂魄は、紅葉の瀑布の上の美しい遺骸の上に通ふやうであつた。私は春の目覺といふやうなことを、この少年の上に考へずにはゐられなかつた。彼れは何んと思つたか、鼻緒の切れかゝつた利休で、一散に北の門の内へ走つて行つて、水屋の方に外れた。

私はまた三月堂の奥を覗き込んで、あの永遠を凝視してゐるやうな、柔かく、しかも神々しい眼をもつた梵天像が見たくてたまらなかつた。神と人間との境……それをあの塑像に於いて見ることが出來るのである。婆羅門敎の神としての彼れ、其の圓滿具足大自在の姿は、高僧良辨の手によつて、良辨思想を盛つて、長へに、光を放つてゐる。

二十五

この堂の本尊は、不空羂索佛である。梵天と帝釋天とが、其の脇士として立つてゐるのだ。婆羅門敎の神は、天竺の神とゝもに、本尊を護り扶けてゐる。しかし、其の作の藝術的優秀は獨り梵天の上にのみ輝いて、三十三天の主を言ふものは尠く、本尊の名を口にするものもまた乏しい、其のほかなほ數體の佛像はたゞ、頭數だとされてゐる。三月堂は梵天像によつて代表され、梵天像は三月堂によつて光を增すと言はうか。

平城朝後期の建築は、三月堂の內部に於いて、殆んど完全に其の面目を保存されて、當時全盛の唐の文明と、日本傳來の思想との、ほどよく調和された美しさを、この燃質物の上に、今までよく燒けないで遺されたものだと、先づこれに感心させられるのである。これと同期の建築になつた最初の大佛殿が、今に保存されてゐたならばとは、三月堂を見るものゝ、何人も感ずる處であらうが、あの大きな木造建築を千年からも燒かずに遺さうといふのは、抑も無理であらう、三月堂は小さいから遺つた、小さい上に、東の山の裾に、離れて建つてゐたから遺つ

た。孤獨は結局彼れの幸福であつた。

私は建築に就いて、何んの知識もない、しかし、これくらゐのことは、この土地の少し心得のあるものは皆知つてゐる。私はこの堂の外形が内部に比して些か劣つてゐるのを感じつゝ、それが鎌倉時代の營繕の結果だといふことを、興丸に敎はつたのだ。梵天像の傑作であるのは子供も皆知つてゐる。

私はそれからそれへと、いろ〳〵のことを考へて、いつまでも三月堂の傍を立ち去りかねた。朝一回、夕一度、何をおいても、この堂に近づいては、飛鳥朝を經た平城朝の渾然たる文明、和銅を過ぎて天平に及んだ圓熟した藝術、一千餘年前の、この國、この都の生活!……美しい戀と、傑れた詩と、今に遺された立派な建築とによつて、平和であり、幸福であつた我々の祖先の身の上を偲ぶのも、この廢都のこの土を踏まなければ出來ない業である。

何やら言ひながら、興丸が草履に穿かへて、北の門から駈け出して來たと思ふと、やがて、粗末な桶に納められた荷物が、人夫の肩に擔ぎ出されて來た。ほんたうに荷物と言つてよいやうな扱ひかたであつた。古濱の澤庵か、各產の奈良漬の大樽でも運んでゐる樣であつた。極上

等の奈良漬は、四斗樽いッぱいの酒粕の中に、たゞ一本漬かつてゐると聞いてゐる。其の傑れた奈良漬を擔いだほどには、もとより人夫どもはこの荷物を大事にしてゐない。怪し氣な荷物には、市吏が附き添うて、良辨杉の脇から、ドン〳〵と大鐘の方へ下つて行つた。其のだらだら坂は、昨夜の闇に、あの桶の中の人が歩いて下つた其の坂である。

私は痛ましさにたへかねて、じつと其の哀はれな荷物の一行を見送つた。朝露がばら〳〵と良辨杉の梢から零れた。

二十六

檢死官の一行は、社務所へ立ち寄つてゐるやうで、北のお廊の南の端の上り口には、靴が三足ほど、亂雜に脫ぎ棄てゝあつた。私は定めて、悲哀を自殺婦人の話が、しめやかに蟇りを帶びて、伯父との間に交換されてゐることであらうと思ひながら、伯父の病室の方から廻つて、社務所へ入つて行くと、いつの間にか一人殖えた白服の檢死官と黑服の醫師と三人で、伯父に向つて、頻りに骨董談を試みてゐるのであつた。何が可笑しいのか、高らかな笑ひ聲さへ聞え

た。

大きな粟田燒きの夏茶碗の瑕のあるのへ、金漆で繕ひをしたのに、伯父の大きな手で薄茶が立てられて、洋服の男三人に次々へと振舞はれてゐた、みんな一通りそれを受けて飲むだけの作法を知つてゐるのは、私は感心して見てゐた。菓子には、ぼうろが出されてあつたが、茶を先きに飲んで、後から菓子を食べるといふやうなのは、一人もなかつた。いづれにも可なりの心得のありさうなのが、其の物ごしでよく分つた。

話は、鐵齋の筍の畫讃の額に移つて、伯父を初め、四つの頭は、皆楣間を仰いでゐた。なかなか侮れない南畫論が、白服帶劍の人の口から迸り出るのに、私はいよ〳〵感心した。

『お前にも一服やらうか。』と、伯父は夏茶碗を拭き〳〵、背後を向いて私に言つた。私なぞに頓著しないで、三人の客は南畫論を闘はしてゐた。

伯父は私への一服を立て〻から、徐ろに立つて、還城樂の舞ひを描いた二枚折りの屏風の蔭の唐櫃から、横物の小な軸を出して來て三人に見せた、暑くるしい古段通の上に擴げられた其の軸は、僧の友禪の描いた絹本の『群馬』で、草の青々とした牧場に、鹿毛や栗毛や連錢葦毛

なぞの駒が、十二三頭も放し飼ひにされてゐる細かい圖であつた。馬の一つ〳〵に、異つた性質——活くる力——の表はされてゐるのが、この畫の傑れた特色であつた。

『これは珍らしい。……』と、白服の人は、八字髭捻りながら、其の『群馬』に見入つてゐたが、

『友禪……友禪染を發明した坊さんの畫だ。』と、今一人の白服の人を顧みた。

『はゝん。』と答へて、其の人は心の底から感心したやうであつた。醫者はもうこの畫を見たことであると見えて、金口の紙卷煙草を吹かしつゝ、離れたまゝで、ちよい〳〵『群馬』を見てゐるだけであつた。

やがて三人は、暇を告げて、遊覽にでも來た人のやうに、悠長な風で、樓門から一の鳥居へと、暢氣さうなことを話し合ひながら、下つて行つた。

こんなことで朝の食事がひどくおくれた。私は小母が私の爲めにわざ〳〵炊いてくれた白い御飯を辭して、興丸と〻もに香ばしい茶粥を喰べてから、また裏山へ、美人の死んだ跡を弔ひに出かけた。

二十七

まだ朝露の乾き切らぬ小笹の繁つた小徑をば、私は古戦場へでも行くやうな思ひで、寂しく歩んだ。現場であつたところには、小笹や草の少しばかり踏まれたり壓し付けられたりした痕が見ゆるだけで、何んの變つたこともなかつた。楓の老木と若木とが、親子のやうに枝を交はして繁つてゐるが、哀れな最後を誘うた縮緬の扱帯の懸けられた太く低い枝は、父が子を勞はつてゐる風に老木から若木に向つて長く伸びてゐる其の枝であつた。踏臺に使はれたと思はる古株は、この老木の父、若木の祖父で『このたびは幣もとりあへず……紅葉の錦神のまにまに』の古い時代を知つてゐる其の楓の遺骨かも知れない。

私はだん〳〵感傷的な心持ちに引き入れられて行つて、何處からか若い人が見てゐたら、あの美しく若い人の後を追はうとする心中のかたわれとも思はれたかも知れない樣子をしてゐたであらう。

小笹の繁みの中にさら〳〵と音を立つるものは、紅葉の瀑布を作る細い流れであつた。露に

濡れた笹の葉を分けて、其のせゝらぎに手を浸してみると、今日はどうしたことか、なか〳〵水が多くて、興丸の口はおろか、象を連れて來たとて、飲み乾せさうになかつた。源には可なりな水があるのだが、途中で方々へ引かれて、小さな瀑布を幾つも作るのと、落葉に遮られて、横へ外れたりする爲めに、紅葉の瀑布はいよ〳〵細くなるといふ伯父の述懐であつたが、今日はこの淸い流れが、哀な美人の死を弔うために、わざ〳〵此方へ多く流れて來たものかなぞと考へつゝ、美人に向つて自然がこぼす涙とも思つて、私は其のせゝらぎの音を哀深く聞いてゐる。

紅葉の瀑布の落ち口までは、其處からまだ二三間あつた。私は細い流れに沿うて、其の崖の上へまで行つたが、細い瀑布は、水の多い割に、さして太くもならずに、矢張り雨滴の如く、たらたらと樋から落ちてゐた。

楓の枝につかまつて、危なつかしく下を覗くと、興丸がまた何か悪戯もがなと、工夫を凝らしてゐる風で、方々を見廻しながら、棒きれを持つて立つてゐた。

『其處から、下りて來やはれ。』

高く筆葉の鳴るやうな聲で、彼れはかう言つた。

『猿ぢやないから、こんなところから下りられやしない。』と、私は足を慄はしてゐた。

『下りられん。……あかんなァ。』と、言ふなり、興丸は梯子を踏むやうに樂々と、蜷を這て登つて來た。若宮の拜殿の前では、清兵衛が今日は稼ぎに出るのを止めて、忙しさうに、神事の下準備と見ゆる、菰なぞを運んでゐた。

死人があつたために、これから清祓か行はるゝのであつた。あの美しい死人に、何んの穢れがあるものか、草も木もあの美しい遺骸によつて清められてゐるのに……と、私はさう考へた。

二十八

其の日の大阪の新聞の夕刊を見るまで、私は哀はれな美しい人の上に就いて、何事も知ることが出來なかつた。

新聞には、「奈良紅葉の瀑布の自殺美人」といふ題で、大きく書いてあつたが、矢張り名前も

住所も確かには分つてゐなかつた、たゞ數日前から猿澤の池の畔の××屋といふ宿屋に泊つてゐた夫婦と稱する若い男女が、前夜出たきり歸つて來ないので、宿帳に據つて、其の男女の原籍地に照會中であるが、多分僞名であらうから、……なぞとしてあつた。あゝして心中を企てて、女ばかりが絶息し、男は恐怖の爲めに氣が變つて、逃げ去つたものであらう、とも記されてあつた。

ところが、欄外を見ると、「紅葉の瀑布の心中男女歸宿す」といふ變な題で、猿澤の池の畔の××屋から前夜外出のまゝ歸らなかつた疑ひの男女は、今日の午後一時頃、蒼い顏をして、飄然と戻つて來た。夜中鶯の瀑布へ行つて、春日山の奥深く迷ひ込んだのであつた。これで紅葉の瀑布の死美人の身元と、心中のかたわれと見られてゐる男の行方とは迷宮に入つた。と書いてあつた。

この新聞に載つてゐる死美人の遺留品を委しく掲げた中に、懐中鏡の見えないのは、あれをあのまゝ倭文機が持つてゐて、檢死官に渡さなかつたのであらう。それから、前夜紅葉の瀑布の下——若宮の後——におちてあつた青い絞りの縮緬の扱帶と、翡翠の玉の簪とは、あの

まゝ清兵衛の手に握られて、矢張り警察の方へは渡らなかつたのであらうと思つて、私は少し其暢氣さに呆れてゐた。

伯父はもう枯木のやうな心で、若い男女の心中譚なぞには、些かの同情も興味もなく、將たそれを顰蹙するさへ面倒くさゝうであつたが、たゞ自分の拵へた紅葉の瀑布といふものが、大きな字になつて新聞に現はれたのを喜ぶらしく、洋銀の緣の老眼鏡をかけて、幾度もく、其の紅葉の瀑布といふ大きな活字の跡を見なほしてゐた。

私はぶらりと、北のお廊を出てまた、三月堂の前へでも行つてみようと、思ひながら、水屋の脇から、女部屋と勝手とを兼ねた別棟の裏口を入つて行くと、湯殿の横手の二疊に、ちらりと倭文機の影を見た。またお化粧にでも取りかゝつてゐるのかと、足音を忍ばせつゝ窺と樣子を窺ふと、古い八つ足の上へ、白木のお厨子のこれもだいぶ古びたのを載せて、其の前に洗米なぞを供へ、一心に祈念を凝らしてゐる倭文機の後姿が、しよんぼりと寂しく哀はれであつた。

あのお厨子の內部には、何があるのであらうかと、私は、坐ろに好奇心の湧くのを覺えた。

午後の晷は、生駒山に沈みかけても、蒸し暑さが、却つて加はつて來るやうであつた。拔き衣紋にした倭文機の盆の窪の下には、汗が浮き出して、頸の白粉を流さうとしてゐた。

『わッ。』と叫んで、私は倭文機を驚かさうとした。

二十九

『あらッ。』と倭文機は、不意を打たれて、身をかはす術もないといふ風であつた。お厨子や八足臺を、手早く押し隱したいのであつたらうが、それには些か物が大き過ぎた。どうもしようがないといつたやうな顏をして、彼女はもう諦めたらしい樣子を見せた。

私は倭文機が飯事——にしては大きすぎるけれど——のやうな齋壇を拵へて、何を祀つてゐるのであらうかといふことが氣になつた。まさかに彼女を棄てた彼女の先夫の靈を祀つてゐるのではあるまい。

彼女は十六の年に、大阪の或る小間物問屋の息子に嫁いだ。——ほんたうに『嫁ぐ』とか、『娶る』とかいふにふさはしい奮式な結婚であつた。私は七歲八歲の頃から妹のやうにして可愛

がつてやつてゐた倭文機が、これからまだ〳〵教育を受けなければならない少女期にあつて、小學校を卒へると間もなく、人の妻になるといふことに哀憐よりも先づ恐怖と不安とを感じたのであつた。まだ固い蕾をば、春なほ淺い頃に、無理から綻ばせようとするやうな、少し熟しかけた色が、漸く見え初めるのも待たないで、捲り取らうといふやうな、むごいことをするものと、其周圍を憎まないではゐられなかつた。もとより私が、倭文機をどうしようとする氣持のあるわけではなかつたが、何となく、掌中の珠をば、いきなり攫み去られるといふ狼狽と愛惜とを禁ずることが出來なかつた。私は東京から遥々と倭文機に少女雜誌やリボンなぞを、時時贈つてやつてゐたが、突然それに婚禮の祝ひ物を贈らなければならなくなつたのに、まごついたのである。少女雜誌から紅白の眞綿……それは餘りに急劇な變りやうであつた。殊にあの嵩高いものを郵便小包にするのに工合がわるかつたから、わざ〳〵取り寄せた眞綿を無駄にして、私は小さな縮緬の鯛を二尾贈つた。それが十六の少女の花嫁姿に捧ぐるものとしては、手遊品じみてゐて、ふさはしいと思はれた。

私は、それから倭文機の七年間の生活の內容に就いて少しも知らなかつたのである。彼女に

夫が出來てからは、彼女との手紙のやりとりもパツタリ絶えてしまつた。ところが、今から六年前の夏、まだ若い夫婦が幼兒と三人で、日光中禪寺の湖水へ、船頭なしに舟を漕ぎ出して、日が暮ても歸つて來ず、翌朝になつて、空の舟が湖上を漂うてゐたといふ哀れにもまた夢の國の出來事のやうな話を、新聞紙で見て、其の男の名前が、倭文機の夫と同じであるのにギクリとしたけれど、女の名が倭文機でないのに安心してゐると、それが矢張り倭文機の夫で、倭文機には內證で設けた幼兒と其の母との三人で、底知れぬ深い湖に沈んだのであつた。倭文機は子はなかつた。

私は倭文機が今こゝに祀つてゐるお厨子の中のものが、或は彼女を棄てゝ仇し女と心中した其の無情な男の寫眞でゝもあるかと思つて、一種の憤りを帶びた手で、倭文機を押し退けつつ、お厨子の扉を開かうとした。

三十

倭文機が、胸や腕の奥深くを、ちよい〳〵露はしつゝ、お厨子に近付かうとする私を防ぐ樣

子は、無邪氣な子供のやうでもあり、執念深い年増女の狂態の如くにも見えた。何處から分泌するか、成熟し切つた女性のにほひが、極度にまで毒々しく私の鼻を衝いて、私は殆んど眩暈を催しさうになつた。

こんなにまでして爭ふからには、あのお厨子の中に、珍奇なものが納められてあるに違ひないと思つて、私は幼い頃からの馴染だけに、『お廢しなさいよ』と眞顏になつて、私を押し退けようとする倭文機をば、何んの遠慮も容赦もなく、此方から强く押し退けて、到頭お厨子に近づくなり、飾りの小さい海老錠を片手で外し、他の片手で倭文機の肩口を壓し付けつゝ、漸くに扉を開くと、內部から現はれたのは、何んのことだ、裏山の小徑の小笹の中に遺ちてゐた、あの圓い懷中鏡であつた。

どんな祕密が納められてゐるのか、隱さうとするほど餘計に見たくなる好奇心から、私も少し執念深か過ぎる動作をもつて、このお厨子に迫つたのであつたが、神祕の黑ずんだ扉を開いて見ると、內部はこれだ。私は呆氣に取られた。

『亂暴な人ね。……』

さう言つて、倭文機は怨めしさうに、私の顏を見ながら、亂れた鬢を掻き上げたり、はだけた胸を合はせたりしてゐた。

私は何んとなく勿體ない氣がするのを、感じながら、なほもお厨子の中へ手を差し入れて、よく〳〵改めて見ると、矢張り鏡ばかりではなくて、其の奧に手札型の寫眞らしいものがあつた。偖こそと私の第二の好奇心は、素早く其の寫眞を引き出して見ようとしたが、倭文機はもう觀念したといふ風で、何んの制肘をも加へず、防禦をも試みなかつた。

定めて彼女の先夫であらうと考へて、私は其の小さく寫つた姿に目を注ぐと、男の寫眞には違ひないが、彼女を棄てゝ、仇し女と其の腹から生れた子と三人で溺水に沈んだ其の人ではなくて、どうかすると、私たちも忘れてゐる彼女の第二の先夫、……彼女が日光の山へ第一の先夫の最後の場所を弔ひに行つた歸りの東京滯在中に、不圖した緣から契りを結んだ第二の先夫の洋服姿であつた。この男は彼女が二十二の年から一年半ばかりの間、殆ど彼女に東京語を敎へる爲めに、同棲してゐたといふ有樣で、故鄕の父母の反對から、無理に夫婦別れをしたほどの弱い男であつたが、父母の反對は主として、倭文機の第一の先夫が新聞にまで名を謳はれた

男だつたといふことに、嫉妬の心をもつたものらしい。

私は倭文機が、其の蕾の時代を無理に手折られた男――さうして、他の仇花に迷ひ込んで自分を棄てた第一の先夫――よりも、雙方の理解から、自由に結合した第二の先夫に、今なほ心を寄せつゝ、かうして、其の男の洋服姿の寫眞を祀つてゐるのに、坐ろ涙を催して來た。

さうしてまた、紅葉の瀑布の裏山で、心中を企てゝ、男に逃げられたまゝで、獨り淋しく死んだ同時代の同性に同情して、其の女の遺した鏡を、自分の慕ふ男の寫眞に合祀してゐる倭文機の心根がいぢらしくてたまらなかつた。祭祀の方法が飯事のやうでありながら、スツカリ式に適つてゐるのは、流石に彼女も神主の娘であつた。

私は露の浮んだ眼をしばたゝきながら、其處を立ち去ると、また三月堂の方に向つて歩んだ。

石川五右衛門の生立

一

文吾（五右衛門の幼名）は、唯一人畦の小徑を急いでゐた。山國の秋の風は、冬のやうに冷たくて、崖の下の水車に通ふ筧には、槍の身のやうな氷柱が出來さうであつた。布子一枚で其の冷たい風に慄へもしない文吾は、實つた稻がお辭儀してゐる田圃の間を、白い烟の立ち騰る隣り村へと行くのである。

隣り村には、光明寺といふのがあつて、其處の老僧が近村の子供たちに手習ひをさして實語教なんぞを讀むことを敎へてゐる。文吾も、今年の春から其の寺へ通ひ初めたのであるが、朝寢坊の癖があるので、いつも遲れ勝ちで、朋輩が双紙を半分も習ひ終つた頃、文吾の小まちやくれ姿が漸く庫裡の入口に現はれるときまつてしまつた。

『文吾はん、早う起きいしいや。』と、母は朝の支度が出來た時、文吾の枕邊に立つて、優しく呼び起すのであるが、文吾は微かに眼を見開いて、母の世帶疲れのした顏を見守つたばかり、

また眼を閉ぢて、スヤ〳〵と眠つてしまふ。こんなに眠むがるものをと、母は足音を忍ばせつつ、勝手の方へ立つて、井戸端に絞り上げてある洗濯物を竿に懸けてから、御飯は文吾が起きてからと、お膳を片寄せて置いて、板の間につくねてある賃仕事の縫ひ物にかゝらうとしたが、幾ら何んでも、あんまり遲い。もうお寺通ひの子は殘らず行つてしまつて、表には子守り唄がのんびりと聞えてゐる。文吾は狸寢入りをしながら、母のすることを一つ〳〵手に取るやうに、座敷の寢床の中で知つてゐるのである。

ねんねこ、さんねこ、
酒屋の子。
樽にもたれて、
寢た心。
こい〳〵。

子守り唄は文吾の耳へもハッキリと聞えて來る。こんな、眠りを誘ふやうな唄をうたはれても、文吾は更に眠くないのである。もう起きてやらうかと、小さな身體をもぐ〳〵さしてゐる

枕頭へ、母の足音が、遠くから響くやうであつた。また起しに來たのだなァと思ふと、文吾は起きるのが厭やになつた。さうして。ヂッと眼を瞑つて熟睡を裝うてゐた。

ねんねこ、ねんねこ、
酒屋の子。
縛にもたれて、
寢た心。
こい〳〵。

さらに近く子守り唄が、窓の外で聞えた。母の足音は、文吾の枕邊まで來て、はたと止まつたが、今度は『文吾はん、起きいしいや〳〵』といふ聲も聞えないで、たゞ側に近く人が立つてゐるといふ氣色を、文吾の狸寢入りの魂魄に感じさせるだけであつた。

ぽつり。……

雨の日に、この荒れた家の天井から落ちるやうな雫が、文吾の頰に垂れかゝつて、冷りとした心持ちは、文吾の全身をビタ〳〵と慄へさせた。文吾はまた細く眼を見開かうかと思つたが、

ヂッとこらへて、頰にかゝつた雫の、全身に滲み渡るのを感じつゝ、何か劇しい藥でも付けられて、肉を爛らし、骨を燒く苦みが、今にもやつて來るやうに思はれてならなかつた。

頰にかゝた雫が、母の涙であることを、文吾は直ぐ悟つたのであるが、母の涙には、恐ろしい毒でも混つてゐるやうに思はるゝことがあつた。愛兒の枕頭に立つて、其の寢顏に見入つてゐる母の爲めに、文吾はいつまでも狸寢入りをしてゐなければならないやうな氣がした。

文吾が寺へ手習ひに行くのは、毎朝こんな風で遲れるのであつた。お師匠さんも、もう小言を言はなくなつた。朋輩もあまり待たされるので、誘ひに來なくなつた。文吾の机は、みんなが双紙を半分から習つてしまうまで、毎朝必ず空であつた。文吾が來るまでに、欠伸の一つや二つは、お師匠さんの齒のない口から漏れた。

二

寺へ手習ひに行く道で、文吾は大きな柿の木に、京紅で染めたやうな、眞ッ赤の御所柿が、枝もたわゝに熟してゐるのを見た。

『可味さうだなア。』と、文吾は思つて、唾液を呑み込み呑み込みした。『喰べたいなア。』と思つて立ち止まつた。それが爲めに、寺へ行くのが遲れた上をなほ遲れた。

『一つ取つてやらうか。』と思つて、身の輕い文吾は、其の柿の木に登りかけた。人が見てゐやしないかと考へて、一番下の枝に足をかけながら、方々を眺め廻はしたが、誰れも見てゐるものはなさゝうであつた。文吾の小さい身體は、夥しく實つた御所柿の中へ潜り込むやうにして入つて行つた。一匹の蟻をば砂糖壺の中へ投げ込んだやうに、文吾は可味さうな柿の實に包まれてしまつて、まど〳〵した。どれから摧り取らうか、と手のやり場に困つた。

さうして、一番小さゝうなのを一つ取つて袂へ入れた。この時どうして、一番小さゝうなのへ手が行つたのか、文吾は後で考へてみて、どうも解らなかつた。一生解らなかつた。五右衛門になつてからも、この折りの心持ちを考へてみて、幾度首を傾けたか知れなかつた。

忙しい手付きで、小さな柿を一つ取つて、袂へ入れると、次ぎにはまたどれを取らうかと、手がまごつき始めた。左の手にシッカリと枝を握つて、右の手では、近まはりの柿の實を撫で廻はした。何んだか毟り取るのが可哀さうにも思はれて來たのである。

『どいつちや。……柿盗人、奴盗人。』

大きな聲を、眞下から鐵砲丸か花火のやうに打上げられた文吾は、足を蹈み外さんばかりに驚いたが、兩手でしッかり枝に捉まりながら、柿の實の間から下を覗くと、弓矢を持つた獵師が、眞ッ赤な口を開いて立つてゐた。あの大きな口の中へ、柿の實を一つ投げ込んでやりたいと思ひながら、文吾は默つてゐた。

『どいつぢや。人んとこの柿を盗みさらして。……さア下へ降りて、取つた柿を出せ、降りやがらな、打つぞッ。』と怒鳴つて、獵師は弓に矢を番へつゝ、キリ〳〵と引き絞つた。それでも文吾は動かなかつた。打つなら打つてみいと思つて、動かなかつた。すると、獵師の引き絞つた滿月のやうな弓は、八日頃の月くらゐに縮まつて、弱々しいひよろ〳〵矢が。ぴゆうとも音せずに飛んで來ると、文吾の眼の前の、この木では一番大きいと思はれる實に、ぐさとばかり突き刺さつた。味なことをする獵師だと感心して、文吾は木から降りてやる氣になつた。

初めは喫驚しても、文吾の小さな度胸は、もうスッカリ据わつて了つた。矢でも鐵砲でも持つて來いといふ氣になつた。一番下の枝まで傳うて來て、其處から草原へ飛び降りると、獵師

は持つてゐた弓矢を投げ棄て、手甲のかゝつた大きな手で、ぐいッと文吾を引き据ゑた。

『こら、やい。この柿、何家の柿やと思ふてけつかる。』

獵師の罵る聲は、雲に響くばかりに高かつた。文吾はいよ〳〵度胸を据ゑてしまつて、もう少しの恐怖もなかつた。

『さア取つた柿を返せ。返したらお上へ突き出すことだけは宥してやる。』と、獵師は稍靜かに、恩に着せるやうに言つた。

『返さん。……俺の取つた柿は俺のもんや。……お前の腰に提げてる鳩がお前のもんなら、俺の袂に入つてる御所柿は俺のもんや。』

文吾が落ち着き拂つて言ふ言葉と、小まちやくれた態度とは、實に〳〵蹈み潰してやりたいほど憎らしかつた。

『何んぢや、この鳩が俺のもんなら、この柿は貴さまのもんぢや？　阿呆吐かせ。』と、獵師は呆れ返つた顏をした。さうして餘りな圖々しさを憎むのあまり、文吾の襟元を攫んで突き轉ばした。其の途端に袂の柿がころ〳〵と草原に轉がり出た。選りに選つて見窄らしい小さな柿なのを、獵師も意外に思ふ風で見てゐたが、更に文吾を捻ぢ伏せて、兩の袂から、懷中までを改めた。

『何んぢや、たつた一つか。』と、獵師の言つた言葉は、文吾の耳へ嘲笑はれたやうに響いた。もつと大きなやつを、ドッサリ取つてやれば好かつたと、文吾は殘念でたまらなかつた。さうして、彼れは怨めしさうに、大きな御所柿の木を見上げた。

三

それから文吾は、夜になるのを待つて、其の御所柿を取りに行くことにきめた。しッとりと夜露に濡れた柿の實の風味は、また格別であつた。

『これ貰うて來たんや。』と言つて、大きなのを二つばかり、母に持つて歸つてやると、柿の好きな母は、何も知らずに、ほく〳〵喜んで、研ぎ減らした小刀で、薄く細く長く皮を剝いた。都は三條の大橋の欄干に凭れて、白い玉を溶かしたやうに美しい水の上まで、剝いた柿の皮を屆かしたといふのが、母の自慢話の一つであつた。若い頃都で御殿奉公をしてゐた母の言葉に

は、京訛りが殘つてゐた。

『關白さんの上る柿や。』

さう言つて、母はもく〳〵と淡紅色の御所柿の一片を前齒で嚙んでゐた、奥齒の一つもない母は、馬のやうに前齒でばかり喰べるので、嚙んだものが膝の上へぽろ〳〵とこぼれ落ちた。

あんまり毎晩、見事な御所柿を持つて來るので、母はそろ〳〵怪み始めた。文吾はそれを知らないのではなかつた。母の心を疑はせるといふことが、文吾には何んとなく面白いのであつた。

『文吾はん、あんたこの柿を何處のお方に貰うといなはるね。こないによう毎晩呉れはりまんな。』

母は少しむづかしい話になると、いつもかうやつて、目上に物を言ふやうにして、文吾に對するのであつた。そら來たな、……と、文吾は思つた。

『人に貰へやしまへん。天から授かりまんね。』

文吾はかう言つて、ニヤリと笑つた。それがどうして、七歳や八歳の幼いものゝ口から出る

言葉かと、母は呆れてしまつて、文吾の幼顔に浮ぶ不敵の面魂を見詰めてゐた。さうして、急に差し俯向くと、文吾の小さい膝の前に伏して、めそ〳〵と泣き出した。母の方が幼い者のやうになつてしまつた。

けれども、母は滅多に外出をしないで、家で賃仕事をしてゐるから、隣り村の大きな御所柿の木のことは知らなかつた。木に生つたのを盗んで來るのか、何處かの家に藏つてあるのを攫つて來るのか、ハツキリとは分らないが、どうしても正しい品ではないと思ふと、母は今まで喰べたお美味い御所柿を、殘らず吐き出したいと思つたのであらう。いきなり首を擡けると、前にあつた二つの大きな御所柿を取つて、表の方へ投げ付けた。さうして、

『文吾はん、何んであんたは、そんなさもしい心になつて呉れたんや。』と言ひ〳〵、小さい膝を、皺だらけの手で搖り動かした。

『阿母さん、柿はあゝやつて、自然に生つてゐるんやおまへんか。人間に喰べさせやうと思ふて生つてゐるんやおますまい。あの井戸の水が人間に飲まれようと思ふて湧くのやないのと同なしこツちやらう。柿を取つて喰べるのが盗人なら、井戸の水を汲んだり川の水を掬うたりし

て飲むのも盗人や。』と、文吾の幼い智慧は、えらいことを考へ出して來た。

『無茶言ひなはるな。……川の水と柿とが一緒になりますかいな。』と、母は百結衣の袖でそつと涙を拭いた。

『取つて喰べるのが悪いのんなら、人の見る前で生らん方がえゝ。生るよつて喰べるのは、當り前やないか。これは俺の柿や言うて、自分一人のもんと勝手にきめたかて、柿の方では、そんなこと知りよれへん。持つてる人が木へ登つて捲らな、ほかのもんでは堅うて取れんし、また木へも登れん。よしんば登つて柿を取つて來ても、持つてる人やなけれや、皮も剝けんし、歯も立たんといふのんなら、ほんまに其の人の持ち物ときめることが出けるけれど、誰れでも登らうと思うたら、其の木へ登れるし、持つてる人の手でなうても、捲ると取れるし、取つて來たらかうやつて、誰れにでも喰べられるんやもん、これは俺の柿やときめるのは嘘や。誰れの柿でもない柿は柿の柿や。そやなかつたら、皆んなの人の仲間持ちや。』と、文吾は母の前に片肱怒らして、小僧らしいことを言つた。

『無茶ばつかり言うて、そんなら文吾はん。あんたはこれから、人のもんも自分のもんもない、

欲しなつたら、何んでも取りなはるんか。』と、母は涙の眼を輝かして、文吾の小さな膝に詰め寄つたが、また忽ち崩れるやうにひれ伏して、わつと泣き出した。

四

『文吾はん、あんたはお父ッあんの顔を知らんのやなア。……』

夜も更けて、親子枕を並べて寢てゐる時、母はこんなことを言つた。文吾がよく眠つてゐると思つて、獨言のやうに言つたのを、折節眼を覺ましてゐた文吾は、『うッすら覺えてる。顔の平たい、大けな人やつた。』と、寢惚け聲でかう言つて、何か喰べてゞもゐるやうに、口をむにやむにやさした。

『あゝ、あんた起きてなはつたのか。』と、母はきまりわるさうにして、向ふへ寢返りをした。其途端、蒲團が狹いので、足がドタリと疊の上へ滑り落ちた。この村で疊の敷いてあるのは、この石川の家のほかには、莊屋ぐらゐのものであつた。家は荒れ果てゝも、破れ疊に昔し榮えた名家の跡を見せてゐた。疊の敷いてある家と言へば、それがどんなに破れてゐても、人は其の

家を敬ふことを忘れなかつた。古疊の上へ足を滑らせると、冷りとした氣持ちが、得も言はれぬ感じを母の胸に與へて、痩せても枯れても、石川の家には、まだ疊が敷いてあるといふ誇りが、全身に漲るのであらう。母は古疊の上へ足をバタ〳〵させてゐた。

『文吾はん、あんたの四歳の時に死んだお父ッあんはなア、あれは、……』と、母は向ふをむいたまゝ言ひかけて、もう泣き聲になつた。文吾は母がまた何を言ふことかと、頓着もしないで、もう御所柿にも飽きたから、明日は一つ、手習ひに行つた時、お師匠さんの菓子箱等にある饅頭を喰べてやらうと思つて、頻りに其の方法を考へてゐた。喰べたくなるのは自然だ。欲しいものを取つて喰べるのは當り前だ。といふ考へは、文吾の魂魄に深く〳〵植ゑ付けられて、なかなか拔き去ることの出來ぬものになつてゐる。

『文吾はん……』と、母はまたくるりと此方へ寢返りをして、疊の上へ滑り落した足をバタバタやつてゐる。

『阿母さん……』と、文吾も夢のやうな聲で呼んだ。

『文吾はん、あんたのお父ッあんはなア。……』と言ふなり、母はむッくと起き直つて、床を

這ひ出し、文吾の側へ寄つて來て、ひしとばかりに其の肩に取り付いた。

『文吾はん、あんた、死んだお父ッあんの代りになつて、わたしの言ふこと聽いとくれ。』と、母の聲は、涙と一ものに、塞いであつたものを取り除いたやうに溢れ出た。——

文吾の父は、由緒ある武士石川左衛門の後裔で、先祖代々伊賀の郷士であつたが、だん〳〵に家が衰へて、多くあつた山林田畑も賣り拂ひ、其の日の米や鹽にも困るやうになつた。しかし、酒だけはどうしても缺かすことが出來ないといふので、母が瓶子を拵いて、遠い山路を濁酒など求めに歩いたものであつた。何處の酒屋でも、石川と言へば相手にしなくなつてゐるのを、無理やりに瓶子を突き付けて、推し込んで行かねばならぬ母は、どんなに辛いことであつたらう。

『酒がないのは、生命がないのも同じことぢや。』と父は毎朝必ずさう言つて、母に酒の才覺を促したさうである。

酒のほかにもう一つ、父の求むる心の甚だ強いものがあつた。それは子だ。『男の子が一人欲しい。仕方がなければ女でもよい。』と、父は熱心に考へてゐた。酒と子供……それが父の求む

る二つの大事なものであつた。しかし、酒は母の苦心によつて、毎晩のこなからは缺かさないが、子供だけは、母一人の力でどうにもならなかつた。

『石川の血統が絶える。……』と、父は毎日溜息ばかり吐いてゐた。

ところが、或る日、どうしてもこなからの濁酒の手に入らぬことがあつた。母は八つ時の頃から、草履の尻を摺り切らして、山一つ越えた向ふの里まで行つたが、酒を借して呉れる家がなかつた。家へ歸ると膳の上に瓶子のないのを憤つた父は、『もう生きてゐられん。酒がなければや死んでしまふ。』と、狂氣のやうに駄々を捏ねる。

もう富てはないけれど、父の憤りをヂッと見てゐることは出來ないので、母はまた瓶子を持つて外へ出た。五月の空はどんより曇つて、村の家々は、燃ゆるやうな青葉の匂ひに包まれてゐた。破れ草履を脱ぎ棄てたので、足の裏が冷たく、霑ひをもつた土に吸ひ付くやうであつた。

酒のありさうな家へは、皆行つてしまつたので、この上は神の力に縋るよりほかはないと思つて母は毎朝跣足まゐりをしてゐる隣り村の平井明神の森へと志ざした。神の青葉は人の青葉よりも更に美しかつた。それが夜だから、こんもりと雲か山かのやうに見えてゐる中へ、鳥居

の下を通つて進んで行くと、燈明もない拜殿の中は、洞穴のやうに思はれた。

近付くほど餘計に顯ひ事が叶ふかと考へられるので、階段を足で探つて、砂だらけの板の間へ上つて行くと、暗に馴れた眼は、眞正面に据ゑてある八足臺の上に注がれて、木の間を漏る星明りに映し出された錫の神酒瓶子が一對、母を引き寄せるやうにして立つてゐた。母は覺えず手を伸ばしかけたが、神さまのものを勿體ないと思つて、慄ふ手を引ッ込めても、其の手はまたいつの間にか伸びて、錫の瓶子にかゝつてゐた。殆んど無意識に、其の瓶子を振つてみると、酒か水か、トプン〳〵と音がした。夫の喜ぶ顏を想ふ嬉しさに、勿體なさも忘れて、瓶子の口に鼻をあてゝみると、芳醇な匂ひが、ぷうんと來た。

『平井大明神…　この賜物を頂いて、夫を喜ばせます。それからどうか子供を一人お授け下さりませ。』と、母は覺えず大きな聲で禱つた。

其の時、何處から現はれたか、白衣を着けた大きな男の姿が、母の眼の前にあつた。母は『きやッ』と叫んで、氣絶せんばかりに驚いたが、其のかよわい手を掴んで、ぐいッと引き寄せた白衣の男は、母の耳に口を寄せて言つた。

『わしはお前に、美い酒を授けてやつた。これからえらい子供を授けてやる。……』

それは、ほんたうに神の聲のやうであつた。——

此處まで語つて、母はあとを言ふことが出來ないで、泣き嗄りになつた。

『文吾はん、わたしはなア。お父つあんを喜ばさうと思ふた餘り、お酒と子供が欲しさに、言はうやうのない大きな罪を犯したんや。神さんのお宮を穢したんや。お父つあんが生きてゐるうちに、何遍白狀しようと覺悟したか知れんが、言ひそゝくれて、臨終の床にも間に合はんことになつた。お父つあんの代りに、文吾はん、あんたに白狀したのやよつて、どうでもして、わたしを責めとくれ。』と、母の言葉は、矢張り涙とゝもに溢れ出た。

けれども、それから母がまた涙とゝもに言ふところに據ると、文吾はどうも、自分のほんたうの父は、其の暗黑の中から出た怪しい白衣の男だと思はれた。『あんたの四歳の時に死んだお父つあんはなア、……』と、母が泣き顏をして言ひかけては、後を止めてしまつた言葉の破片が殘りなく拾はれたやうな氣がした。

都にまで響いた大盜賊の何某が、六十六部に姿を扮して、長いこと平井明神の拜殿に隱れて

ゐたといふこと。……

父は文吾を、平井明神の申し子だと信じ切つて、有り難がつてゐた。自分の面差しに少しも似てゐなければ、また性質のまるで反對な文吾をば、却つて餘計に可愛がつた。……

文吾は、母の口からこんな風の痛ましいことばかり、いろ〳〵と聽かされて、深く自ら心に決するところがあつた。

五

寺へ手習ひに行く時、文吾は街道の煮賣屋の前を通るのが厭やであつた。畦を渡り、小徑を拔けて、少しでも近い方を行くのであるが、其の煮賣屋の前だけは、どうしても通らなければならなかつた。一束の杉を吊した軒下に、『名物にしん蕎麥』とした字が、障子へ大きく書いてあつて、其の奥に主婦の蒼白い顏が、ふは〳〵と水にでも浮いてゐるやうに見えてゐた。薄暗いところで、黑い着物を着てゐるので、顏だけがくッきり現はれて、身體は煮物の臭ひの漂ふ中に暈されてしまつた。

冬の寒い盛りにも、賣買屋の表は障子が一枚だけ開いて、街道を人が通る度に、蒼白い主婦の顔は、きッと此方を見た。足音がしないでも、人さへ通ると、主婦はそれを其の低く平べったい鼻で嗅ぎ取るかのやうに、直ぐ感知して、此方を向いた。文吾が藁草履に砂埃りを立てゝ通つても、深沓の破れたのに泥を蹈んで行つても、賣買屋の主婦の窪んだ濁つた眼は、決してそれを見遁がさなかつた。

文吾はもとよりこの主婦が、文吾の通る時だけにさうするのだとは思つてゐなかつた。自分ばかりが主婦に注目されてゐるのではないことをよく知つてゐた。日がな一日、其の賣買屋の店の奥に坐り込んで、餺蕎麥や燒豆腐の賣物の臭ひを嗅ぎながら、まるで關所の役人か何かのやうに、一々街道を往來する人に目を着ける。それはもう主婦の心では、見たいといふことを離れて、人さへ通れば、たゞ何かなしに表を見るのだ。人の足音さへ耳に入ると、眼はもう往來を向いてゐる。それがだん〳〵練れて來ると、もう足音なんぞは聞えなくとも、人さへ通れば、眼の球の方が先きにそれを知つて、背後向きに坐つてゐても、くるりと首を捩つて、往來を見るやうになつた。それで、今日はこの往來を幾人ぐらゐ人が通つたかといふことを、主婦

はちやんと知つてゐて、客が來ると、通つた人の數や種類を大聲に話してゐた。文吾も時々それを小耳に挾んで、大和へ越え、伊勢に通ふこの街道筋が、日によつて通る人の數に、大層な違ひのあるのを知つてゐた。

文吾は賣買屋の主婦が、自分の通る時ばかり氣を配つて此方を見るのではないことを知つてゐながら、主婦にヂロリと自分の姿を見られるのが、厭やで〳〵たまらなかつた。どんなに足音を忍ばせて歩いても、杉の葉の吊してあるその軒下に文吾の影がさすと、主婦の蒼白い顏は、きッと此方を見た。曇つた時や、雨の降る日でも、主婦は決して文吾の通るのを見遁がさないから、それが文吾は憎らしくてたまらなかつた。酒を賣るしるしに軒へ杉の葉を吊しておいても、備へた樽はよく空になつてゐた。杉の葉も黄色く枯れかゝつて、焚き付けになりさうであつた。其の杉の葉を指さして、空樽に失望した酒好きの旅人が、主婦を談じつけてゐる隙に、文吾は今日こそ主婦に姿を見られまいぞと思つて、小走りに駈け拔けようとしても、主婦は一心に何やら喋舌りながら、客と睨み合つてゐた眼をば、稻妻のやうに文吾の方へ向けることを忘れなかつた。『さアしまつた。』と文吾は思つた。

どうかして、主婦に見られないやうに、あの杉の葉を吊した店の前を通り過ぎることは出來ないものかと、八歳の文吾の小ひさい魂魄は、いろ〳〵に苦勞を始めた。或る時は、餘りに憎らしくなつて、自分を見るあの主婦の眼を、突き刺してやらうかと思つて、文吾は母の使ひ古した櫚を一本持ち出したことさへある。毎日絲を紡いでゐる母は、糸紡ぎ車から外した櫚の古いのを、危いからと言つて、高い棚の上へ載せてゐた。蹈臺を用ゐても、文吾はまだ其の棚へ手が届かなかつた。ところが、棚の領主のやうにして、塵埃を蹴立つゝ暴ばれてゐる鼠が、櫚を一本轉がして落したのが、ぐさとばかり古疊の上へ突っ立つた。文吾は急いで駈け寄つて、其の櫚を取り上げたが、錆びてはあつても、尖つてゐて、錐より鋭かつた。其處へ母が來かゝつたので、文吾は手に持つた櫚を隠す暇もなく、『鼠ッ、鼠ッ』と棚を指さして叫ぶと、母は慌てた樣子で、上を仰ぎ見たから、其の間に文吾は櫚を懐中へ忍ばせてしまつた。

『文吾はん、鼠が何んにも落せしまへなんだが。……』と言ひ〳〵、母は、あたりを見廻はしたが、古疊の上には、齲齒が痛むとよく紙に包んで痛い齒に噛ませられる鼠矢が五粒ほど、黒くパラ〳〵とこぼれてゐるだけであつた。

『いゝえ、何も落せしません。……其の齒痛の禁厭だけだんがな。』と言つて、文吾は櫚を隠した懐中を押さへつゝ、つぼんと立つてゐた。母は文吾の言葉を疑ふ樣子もなく、昔し榮えた家の面影を殘してゐる廣い裏庭の、崩れかけた土塀の側へ行つて、丹念にしゝし張りをつゞけた。張つて麩糊を引いてゐるのは、文吾の單衣になる繼ぎ接ぎだらけの大和木綿であつた。初夏の空は淺緑に晴れて、山も里もキラ〳〵と輝き渡つてゐた。

六

山城へ行き、近江へ抜ける旅人は、文吾の育つた村の街道を歩かない。大和から伊勢へ、伊勢から大和へ、伊賀路の物靜かな麥秋の頃を、六十六部が多く通つた。

『あゝア、また六部の鉦が鳴るわいな。……』と、母は痩せた胸を、洗ひ晒した澁染めの單衣の上から押さへながら、今にも秋ならぬ時雨の來さうな顔をして、六部の鉦の遠ざかり行くのに耳を澄ましてゐた。一人の六部が行つてしまふて、また一人の六部の鉦が、杉の葉を吊した煮賣屋の方から流れて來た。

『あッ、……』と叫んだ母は、兩手で耳朶に蓋をした。六十六部の多く通る麥秋の頃には、文吾の家の表戸が閉め切つてあつて、六部に留守だと思はせるやうにしてあつた。報謝を受けようとする鉦の音が、いつまでも家の前に鳴つてゐるのを避ける用意だと、文吾は去年あたりから氣付いてゐた。

六十六部の鉦が、夕暮れまでも鳴つてゐると、母は頭痛を起して、奥の納戸へ倒れ込んでしまつた。其處の長押には、槍と薙刀とをかけた跡があつて、得物は疾くに失はれてゐた。

槍があつたら、其の槍で、あの煮賣屋の婆の眼を突いてやるのにと思つて、文吾は梢を隱した懷中を押さへつゝ、表の往來へ駈け出して行つた。煮賣屋の前を歩いて、婆がいつもの通り此方を見よつたら、いきなり飛び込んで行つて、其の目尻の下がつた兩眼を突き刺してやらうと、文吾は其の時、ほんとうにさう考へたのであつた。

文吾の眼からは婆でも、煮賣屋の主婦は、まだ三十七八の殘りの色香を、櫻の若葉に留めてゐるほどの女であつた。年中血の道で、蒼白くふさいでゐても、琵琶をとつては、平家の一曲に村人の涙を咬ることもあつた。この日は茜染の單衣若々しく、背中を往來に見せて坐つてゐ

たか、人が表を通る毎に、細い首を捩ぢ向けて、皿の光りを投げかけることは、一人〳〵に怠らなかつた。文吾がこの煮賣店に近づいた時は、何處で棄てられたか、見馴れぬ子狗が一頭、鼻を土に摺り付けて、物の臭ひを嗅ぎ廻はつてゐた。懷中から梢を取り出して、道傍の缺け瓦に尖端の錆を磨りおとした文吾は、白く光る針のやうな鋭さに見入りながら、これで煮賣屋の婆の眼をば、飛び込んでたゞ一突きと、氣が狂うたやうに、草履の足音もバタ〳〵と、急ぎ足に通りかゝる途端、あの子狗がくん〳〵鼻を鳴らして、煮賣屋の土間へ入つて行つた。さうして、其處にあつたお客からの預り物の簑の端を銜へて引つ張つたので、主婦は其の方へ氣を取られて、この時ばかりは、店の前を態と荒々しく通る文吾の方に眼が屆かなかつた。

きつと此方を見るであらう、見たらこの梢じあの厭やな眼を一突きと、後の難儀も思はないで、飛んだことを考へてゐた文吾は、ほッと息を吐きつゝ、首尾よく煮賣屋の主婦の眼から遁れて、あの店の前を通ることが出來たのを喜んだ。

それから毎日々々、文吾は何か知ら居合はせた子狗なり、鶏なり、雀なり、或る時は空の鴉なりを、種につかつて、其の方へ煮賣屋の主婦の注意を惹き付けておいて、自分だけは其の闕

所役人のやうな目尻の下がつた眼から見遁されることを工夫し始めた。うまく行く時もあるし、しくじることも多かつたし、寺で教はる手習ひよりも、文吾には煮賣屋の前で身を忍ぶ工夫を練るのが面白くなつて、うまく行つた日は終日氣持ちがよく、しくじつた時は、腹が立つて仕樣がなかつた。しかし、もうあの鋭く尖つた櫛で煮賣屋の主婦の眼を突き刺さうなぞといふことは考へなかつた。

朝遲いにきまつてゐた文吾が、此頃は早く來るやうになつたので、お寺の和尚さんも、寺子朋輩も、『これやえらいこッちや』と思つた。早く來ると言つても、矢ッ張り文吾が一番遲かつた。しかし、今までは、みんなが双紙を一面習ひ終つた頃に、さして急ぎ足でもなく入つて來た文吾が、まだ墨を磨つてゐるうちに來ることもあるやうになつた。一同が机の前に頭を揃へて和尚さんにお辭儀してゐる時に文吾の姿が見えるのは、餘ッぽど早いのであるが、遲くとも双紙を二三枚習はぬうちに、文吾の机にも硯や筆や墨が取り出されてあるやうになつた。

或る時はまた文吾が、何時の間に來たのか、隣りの机の子さへ知らぬことがあつた。文吾はまだ來んなアと、和尚さんも朋輩も皆さう思つてゐるうちに、文吾がにこ〳〵して、もう双紙

を一二枚習ひかけてゐるのを見て、あッと驚かされることもあつた。

文吾はそれが得意であつた。煮賣屋の主婦の眼を晦ますことを覺えてから、それをいろ〳〵の人に試みたが、うまく行くことの多いのに、嬉しくてたまらなかつた。『これはうまいなア。』と、文吾は獨りで叫んだ。

七

たゞ足音を忍んで、人の眼を晦ますだけでは詰まらないといふことを、文吾の小ひさな胸は考へ始めた。

初夏から眞夏になる頃には、文吾の忍び足も、おひ〳〵に習練の効を積んで來た。それでも時々、煮賣屋の主婦の目尻の下がつた眼には見現はされることがあつて、『あの糞婆め』と齒噛みをしたが、家の母や寺の和尚さんの眼を晦ますことは、もう何んでもなくなつた。

人の眼を晦ますことが何んでもなくなるに連れて、それをたゞぼんやりとやつてゐることが、文吾には詰まらなくなつたのである。去年の秋の末に顎の外れる程大きな口を開いて、夜露に

霑ふたうまいやつをドッサリ喰べたあの御所柿も、今年は不作と見えて、花が尠なかつた。其の御所柿の樹から、『人のものは我が物、我が物は人のもの』といふやうなことを教へられた文吾は、今度偶然に覺えかけたこの忍び足の法で、人のものを我が物にしてやるのも面白いことであらうと考へた。さうして、それを先づ家の母に試みてやらうと思つて、寺の午休みに、竊と自分の家へ忍び込んでみた。

棚の上を走る鼠の足音の方に、母の心を引き付けておいて、首尾よく一本の棚を懐中に隠し了せたのと、店の土間へ這ひ込んだ子狗に、煮賣屋の主婦の眼を晦ましたのとが、文吾の忍び足の法を會得しかける最初であつたが、近頃ではもう、鼠や子狗がうまく出て來なくとも、小ひさな石ころを一つ、あらぬ方角へ投げ付けた物音の中に、身を隠すことも出來るやうになつた。

裏の崩れた土塀の上を、毛の汚れた野良猫がノソリ〳〵と渡つて行く。折柄絲を紡いでゐた母の眼は、其の猫へ惹き付けられてゐて、文吾が直ぐ背後に立つてゐるのを知らなかつた。

ビイビイビイビイビイ。

チョン。

ビイビイビイビイビイ。

チョン。

絲車は靜かに廻はつて、じんき（白い綿を胡瓜の小さなのぐらゐにしたもの）が長く母の左手で絲になつて伸びると、右の手で廻はしてゐた車が、チョンと把手を鳴らす音と〻もに、棚に巻き着く絲の玉は、だん〳〵太くなつて行く。

ビイビイビイビイビー。

チョン。

異國の歌でも聽くやうな絲車の音は、うツとりとして、人の眠りを誘ふやうであつた。靜かな伊賀の山里の、村人は皆午睡の夢を貪つてゐるのに、文吾の母だけは、夜業をしても足らぬ賃仕事の絲紡ぎにかゝつてゐるのであつた。寺の午休みに駈け戻つて來た文吾は、母の手元にあるじんきの束を取つて、竊と物蔭へ身を忍ばせつゝ、様子を窺つてゐると、自分の廻はす絲車の音に自分の眠りを誘はれながら、ぼんやりと向ふの土塀の上の野良猫に見入つてゐた母は、

左の手に乏しくなつたじんきを繼ぎ足さうとして、手さぐりでじんきの束を求めたが、指先きに當るのは、古疊の藺のほつればかりなので、やッと眼が覺めた風で四邊を見廻はしたが、じんきはそこいらに一本もなかつた。いぶかしさうに小首を傾けた母は、立つて行つて戸棚から一束のじんきを持ち出し、またビイビイビイと紡ぎ始めた。

文吾は再び拔き足して、母の傍に忍び寄ると、其の新しいじんきの束を攫つて、更に物蔭へ隱れた。今持つて來たばかりのじんきの束が、また見えなくなつたのに呆れた母は、暫く考へてゐる風であつたが、やがて絲車を片付け、膝の上の綿埃りを拂つてから、臺所へ行つて火打箱を取り出し、燧石をカチ〳〵やつて、神棚に燈明を上げた。さうして、其の前に長いこと瞑目祈念してゐた。

文吾は攫つた二束のじんきをば、母の直ぐ側へ投げて、忍び足に寺へ立ち戻つたが、七つ過ぎに家へ歸つて、今度は大びらに入ると、母はまだ神棚の前に坐つてゐた。

『文吾はん、氣い付けなはれや。今日は魔物が家の中へ入り込んでるよつて、……』と、聲を震はして言つた。文吾は獨りクス〳〵笑つてゐた。

八

光明寺の和尚さんは、伏見から取り寄せた駿河屋の羊羹で、宇治の玉露を淹れて飲むのを樂んでゐた。紅を刷いたやうな四角い長いものを、和尚さんが大事さうに庖丁で切つて、齒のない口でもぐ〳〵やつてゐる度に、手習ひ子等は何を喰べてゐるのかと思つて、遠くから不思議さうに眺めてゐた。羊羹といふ名なんかは、もとより知らうやうもなかつた。文吾は、初めにそれを見た時、家に歸つて、母に和尚さんの不思議の食物のことを話すと、若い頃都の水を飲んだ母は薄笑ひをして、『それは伏見の駿河屋の晒し羊羹といふもんや。』と敎へてくれたので羊羹といふものゝことをよく知つてゐたし、此頃宇治で出來た玉露といふお茶のことをも、母に聞いてゐた。さうして其の羊羹といふものを、一片喰べてみたくてたまらなかつた。

夏だから襖も障子も開け放してあるので、手習ひをしてゐる本堂の片隅から、庫裡の奥まで一目に見通すことは出來るが、手習ひ子は庫裡へ片足でも蹈み込むことを禁ぜられてゐるから羊羹の納つてある茶簞笥へ近づくことは、文吾の忍び足にもなか〳〵むづかしかつた。殊に本

堂と庫裡との綴ぢ合はせのところには、賢さうな小僧が一人机を控へて、別にお經をさらつてゐるし、まだ若い寺男の眼も、臺所や庭前から光つてゐる。其の中を潜り抜けて、和尚さんの居間に忍び寄ることは、文吾が一生の大事のやうに思はれた。

其の頃は他の國々に、まだよく戰があつて、馬の蹄や、雜兵の草鞋に田畑を蹈み荒らされたり、家を燒かれたり、女を攫はれたりする噂さが、よく耳へ入つたけれど、この伊賀の國だけは、さういふ難儀から暫らく免れてゐた。ところが、此頃毎夜丑三つの刻限に、東の山の上へ怪しい星が現はれて、其の星の下に弘法大師のお姿があり〳〵拜まれるといふことを言ひ觸らすものがあつた。誰れが言ひ出したのか分らないけれど、光明寺の和尚さんも、スッカリそれを信じて、『これはきつと近いうちに、この伊賀にも戰があるに違ひない。それをお大師さんが敎へて下さるのぢや。』と、手習ひ子たちにも言ひ聞かせてゐた。

『和尚さん、戰があると、わたへ等はどないになりますのや。』と、一番年上の手習ひ子は和尚さんに問うた。

「戰があつたら、もうお前ぐらゐの年のものは、軍役というて、兵粮運びなんぞに使はれるし、

家にあるお米や麥は皆取り上げられ、家の納屋も燒かれる。』と、和尚さんは敎へた。

『兵粮運びしたら、駄賃呉れはりまッか。』と、其の手習ひ子は、嬉しさうな顏をした。

『駄賃は呉れんな、駄賃の代りに、流れ矢を貰うて死ぬぐらゐのものや。』と、和尚さんは冷かに笑つた。

『人の家のお米や麥をたゞ取つて、駄賃も呉れいで兵粮運びさしまんのか。そいで家を燒く。まるで無茶やでな。……和尚さんそんな無茶しても、だいじおまへんのか。』と、横合ひから、眉を顰めつゝ問ふた手習ひ子があつた。

『どうもしやうがないなア。軍人は強いよつて。……』と、和尚さんは微笑んでゐた。

『強いもんなら、惡いことをしてもだいじおまへんのやなア。』と、其の子は腑に落ちぬといふ顏をした。

『現世ではしやうがないなア。……強いといふことは、尊いといふこと、正しいといふことより、一枚上手ぢや。』と、和尚さんは、矢ッ張り笑ひ續けた。

『強うならな、あかんわい。』と、誰れやらが大きな聲で、嶋狂に言つたので、みんなは一時に

どッと笑つた。しかし文吾だけは笑はなかつた。

文吾は笑ふよりも考へたかつた。『強いといふことは、善いといふこと、正しいといふことより一枚上手ぢや。』と言つた和尚さんの言葉を、しみ〳〵と嚙みしめて味ひたかつた。さうして、『強うなれ、強うなれ。』と、口の裡で叫んだ。

けれども、よく考へてみると、一人だけでは幾ら強くなつたとて、大勢でかゝつて來られては、兎ても敵はない。之は何んでも手下をドッサリ拵へなければならない。其手下の出來るまでは、近頃覺えた忍び足の法でやつてやらう。他人に出來ないことを自分がするといふのも、矢張り一つの強さだ。強いといふことが、善いといふこと、正しいといふことより一枚上手なら、もう大威張りぢや。自分はこの忍び足といふ強さで、煮賣屋の婆に勝つた、家の阿母さんにも勝つた。これから一つ、この和尚さんに勝つて、どうしてもあのおいしさうな駿河屋の羊羹を喰べればならぬと、文吾は小さな胸に、自ら問ひ、自ら答へて、深く決心した。

其の夜の丑三つに、大膽な文吾は、東の山へ現はるゝといふ大きな星も弘法大師のお姿とを拜むのぢやと、母に告げて、壞れかけてガタ〳〵してゐる雨戸の外へ出たが、其のまゝ跳足に

夜露を踏んで、飛ぶが如く光明寺へ駈け付けると、うま〳〵和尚さんの居間に忍び入つた。

九

『誰れぢや。……奈良枝か。』

暗黒の室の欄間のあたりから、年習ひの折りの小言で、耳の底深く滲み込んでゐる和尚さんの聲が、いやにそは〳〵した調子に聞えた。

これや、しまふたわい、と思つて、文吾は暗黒の室内を、瞳が二つあると言はれる眼で透かして見た。自分が今五寸ばかり雨戸を開けて、少ひさい身體を斜めに忍び込んだところから射す星明りに、茶簞笥や火桶や鏡子が、畳間の通り正しく位置してゐるのを知つただけで、人間の姿は何處にも見えなかつた。

文吾は不思議でならなかつた。和尚さんの今の聲は、一體何處から響いたのであらうか。さう思つて、つひ鼻の先きにある羊羹に手をかけることも出來ないで、隅の方に小ひさく、蜘蛛のやうになつて、壁へ身體を摺り寄せつゝ、ヂッと樣子を窺つた。

畫間は遠くから眺めてゐるばかりで、足の親指の先きだけでも廝居の内へ入れることを許されない和尚さんの居間の疊を蹈んだのは、たいしたことをしたものだといふ誇りが、文吾の胸に湧いて來た。怖ろしいことをしたとか、年に似合はぬ惡いことを企てたとかいふことは、少しも考へなかつた。見付けられたらまゝよ、和尚さんの鶴のやうな首へ食ひ付いてやれといふ大膽さが、腹いッぱいに蔓つた。

本堂の片隅から遠く眺めたゞけでも、文吾の隼のやうな眼は、この室の模樣を手に取る如く突きとめてゐた。しかし今かうやつて、深夜に此處へ忍び込んでゐると、茶簞笥や火桶や鑵子に、一つ〳〵皆息が通つて生きてゐるのではないかと思はれた。殊に鑵子なんぞは、今に足が生え、尻尾が出來て、むく〳〵と歩き出しさうな風に見えた。

生きてゐるのは人間ばかりぢやないのか。――そんなことを文吾は考へた。鑵子に足が出來て、羊羹に羽根が生えて、歩いたり飛んだりしたらどうであらう。……深夜といふ怪しい魔の力は、幾ら利巧でも矢張り幼い文吾に、こんな事が今にも眼の前に起るやうに思はせた。

さうして文吾はまた母が曾て平井明神の拜殿で、白衣の怪しい男に手をとられたのも、かうい

ふ夜であつたかなぞといふことを思ひ浮べた。

『奈良枝、……奈良枝。』

和尚さんの聲は、また固じ高いところから聞えた。文吾は頭を擡げて、欄間を見上げたが、暗くて何にも分らなかつた。

『誰れぢや……奈良枝か。』

今度は和尚さんの聲が低いところで聞えたと思ふと、文吾の寄り添うてゐた壁が、大地震でもあるやうに、ぐら〳〵と動いた。文吾は吃驚してしまつて、これは大變なことになつた、自分より和尚さんの方が矢ッ張りえらいなァと感心した。しかし、このまゝむざ〳〵取り押さへられるのも業腹だから、忍び足の法で、隱れられるだけは隱れてこまさうと、不思議に動く壁を離れて、目指す羊羹の入つた茶簞笥の傍に潜んだ。暗いから隱れるのには都合のいゝやうなものゝ、畫間だけの修業では、夜の仕事にさつぱり役立たぬのを、文吾は泣きたいほど殘念だと思つた。第一和尚さんの眼を晦ます種を、何も見付けることが出來ない。鼠なり猫なり、居合はせた何ものかを種に使つて、相手の氣を其の方へ奪はせ、眼をもそれへ向けさせるとい

ふ工夫が、かう暗くてはどうにもならぬ。これは駄目だ、夜の修業をしなければならぬと、文吾は一つの大きな決心をした。

『奈良枝、……なにしてる。』

和尚さんの聲は、また高いところで聞えた。文吾はいよ〳〵、不思議でたまらなかつた。聲ばかり聞かされて、姿の見えぬ時鳥のやうな和尚さんは、何處に居るのか、さう思つて、キョロ〳〵と、暗い中を見廻はしたが、茶簞笥、火桶、鑵子、それ等のものよりほかに何もなかつた。

其の時、自分の入つて來た雨戸が五寸ばかり開いたまゝになつてゐるのを、一尺ほどに開け擴げたものがある。文吾はぎよつとして、そつちを見た。鑵子に足が生えて動き出すより前に、雨戸が獨りで敷居の溝を滑つたのかと、驚きの眼を瞠つて居ると、流れ星の光りが深い軒を掠めて飛んだのとゝもに、白い布を頭から被つて、其の端を口に銜へた一つの人影が、すうつと縁側に上つて來た。

『奈良枝、……奈良枝。』と、また先刻からの版木で捺したやうな聲が聞えるとゝもに、正面の壁が三尺四方ばかり、眞四角にパタリと開いて、大きな怪物の口かなんかのやうに、其處だけ

が殊に黑く見えた。

『奈良枝、……てんごしいなや。』といふ和尚さんの聲が其の黑い穴の中に聞えたと思ふとカチ〳〵と燧石の音が聞えて、先刻の流れ星のやうな薄い光が、ぴか〳〵したが、やがて手燭の火とゝもに、和尚さんのつる〳〵した頭は吐き出されるが如く其の四角い穴から現はれた。

『なんにもしえしまへんがな。今來たばかりだす。』ゝ言つたのは、たしかに女で、それがあの路傍の煮賣屋の肥えた娘であることも、文吾の暗を探る眼にはよく分つた。

『嘘言ひなや、いかいこと待たしといて、それからあんなてんごしても、吃驚しえへんで。……』と、和尚さんの身體は、其のつる〳〵した頭から、ぽつ〳〵溶けかゝりさうであつた。

『まア、何んでもえゝわ。こつちへおいで、……』と、和尚さんの枯木のやうな手は、賣賣屋の娘の脂ぎつた太い手をとつて、怪物の四角な口の中へ、食はれて行くやうにして、入つてしまつた。和尚さんの手にあの手燭の光りは、白い單衣に鼠色の丸ぐけを締めた鶴の如き姿をくつきりと映し出したとゝもに、丸く肥えて足の短い、龜のやうな娘の容を描き出した。

一人の影が四角い穴の中に消えた時、其處にもちやんと疊を敷いた室のあることを、文吾の

眼はチラと見た。其の途端、四角い穴は元の壁なりに塞がつて、接ぎ目も分らぬ暗黒になつてしまつた。

文吾は何んだか夢のやうな氣がした。あの娘の名はたしか磯栄で、奈良枝ではなかつたがなア、とも思つた。して自分もうつら〳〵と眠くなつたが、ぐらつと頭を茶簞笥の角に打ち付けて、ハッと眼が覺めるとゝもに、眞夜中……男……女……といふ疑ひの雲か、其の頭の中に徂徠した。けれど、幾ら智慧が走つてゐても、まだ幼い文吾には、それがとつくりと解るまでには至らなかつた。けれども變な氣持ちは、彼れの頭を押し付けるやうで、肝心の羊羹を盜むことを忘れたまゝ、ぼんやりと家へ歸つて來た。

東の空には、白い星が大きく輝いて、村の噂の弘法大師の姿は見えなかつた。文吾はぞつと身慄ひをして、母の寢息の籠つた紙帳の中へ潜り込んだ。寺で蚊に食はれた痕が、急に痒くなつて來た。

十

翌る日、寺へ行つて和尚さんの顏を見るのが樂みであつた。其の途中で、籠に入れた茄茨を抱へた糞賣屋の娘に逢つた。『お早よう。』と頷いて行く彼女の頰は、はち切れさうに膨れて、針のさきで輕く突いても、紅い血がパッと迸りさうであつた。この勢ひのよい女と、あの枯木のやうな和尚さんと、それが眞夜中に何の用があつたのかと、文吾はつく〳〵考へた。

寺では、珍らしく文吾が眞ッ先きに來たので、腰衣で本堂を掃除してゐた小僧が、先づ驚きの眼を瞠つた。和尚さんは庫裡から本堂への通り路に、美しく敷き詰めに礫の兩側へ、緣をとるやうにして植ゑてある石竹の花の麗はしく咲いたのを見やりつゝ、石像の如くに蹲つてゐたが、『善海子ッ。』と、いつものは違ふ清らかな聲で小僧を呼びかけて、『今日は雨が降るぞ。』と、朝晴れの蒼空を見上げた。ほんたうに雨が降るのかと思つて、ほんの一瞬間だが、蒼空を仰いだのは、利巧な文吾にも似合はぬおぞましさであつた。文吾はてれかくしに、つと和尚さんの側へ寄つて、

『和尚さん、綺麗だんな。』と言つて、和尚さんの視線を辿りつゝ、同じ石竹の花を見ようとした。

『庭の石竹根が引抜きにくい。庭の石竹根が引抜きにくい。庭の石竹根が引抜きにくい。……さア、文吾、かうやつて三遍續けて言うてみい。』と、和尚さんは澄まし切つて、村の聖顔をしたが、どうしたことか、今朝の和尚さんは、いつもよりズツと聲も樣子も若々しかつた。

『なんぞ褒美おくなはるか。』と、文吾は石竹を莖を持つて、一本引き拔かうとしたが、なか〳〵堅くて、成るほど引き拔きにくかつた。

『慾の深いやッちやなア、こいつ。褒美は望み次第ぢや。』と、和尚さんは齒の缺いた口を尖らした。

『そんなら、あの羊羹一きれおくなはれ。そいたらうまいこと言ひまッせ。』

『よし、やらう。言うてみい。』

『庭の石竹根が引き拔きにくい。庭の石竹根が引拔きにくい。庭の石竹根が引拔きにくい。庭の石竹……』

『もうよい。……えらいやッちや。』と、和尚さんの褒め言葉の終らぬうちに、文吾の小さい掌は、お重ねをして和尚さんの鼻ッ先きに出てゐた。和尚さんは、『あはゝゝゝ。』と大きく笑つて、

居間の方へ行つたが、稍手間取れると思ふ頃、白紙に包んだ二きればかりの羊羹を、大事さうに持つて來て、

『さア、歸つてから喰べるんぢやぞ。此處で喰べると、ほかの寺子にわるいによつて。』と、嚴かに言つた。

『京の三十三間堂の佛の數は三萬三千三百三十三體あるといなさうかいなほんかいな。……さア文吾、これを七遍息をせずに續けて言うてみい。そしたらあるだけの羊羹をみんなやる。』と、和尚さんはまたこんなことを言ひ出した。

文吾は口の裡で、『京の三十三間……』のと繰り返して言つてみたが、四五度まではどうやら言へるけれど、あとの二度がどうしても續かなかつた。一所懸命にやればやるほど息が切れて來た。其のうちに、手に持つてゐた筈の羊羹の紙包みがなくなつてしまつた。

『和尚さん、返しとくなはれ。』

『何を。』

『羊羹を。』

『お前の袂に入つたる。』と、にこりともしないで和尚さんの言つた途端、文吾の右の袂が急に重くなつて、文吾は外から羊羹の紙包みの四角なのを、柔かく探ぐることが出來た。

まだ〳〵和尚さんには兎ても敵はぬ。この和尚さんに教はるのは、手習ひよりもほかにある

と文吾は考へた。

其の夕方、家へ歸つて、黒々と墨の附いた手で先づ袂の四角い紙包みを取り出し、いそ〳〵として披いて見ると、現はれたのは、紅を刷いだやうな駿河屋の羊羹ではなくて、羊羹を切つた形に揑ね上げた寺の粟飯であつた。文吾はあッと呆れた。

十一

こんなことがあつてから、文吾は寺の和尚さんが大好きになつた。今までは好きでも嫌ひでもなかつたのが、好きでたまらなくなつた。手習ひは相變らず厭やだし、『山高きが故に貴からず、木あるを以て貴しとなす。……』義理一遍に讀むのも、面白いことではないが、文吾は成るだけ早く寺へ行つて、少しでも多く和尚さんの側に居たかつた。

どうしても、和尚さんの居間の茶箪笥にある羊羹が喰べられない。それを喰べ得られるまでに、修業をしなければならぬと、文吾は考へた。

まさか丑三つの深夜に、大膽な吾文が寺へ忍び込んだとは、流石の和尚さんも思つてゐないやうである。文吾の方からは、もとより何も言ひ出さなかつた。煮賣屋の娘が夜中に寺へ忍び込んだことゝ、和尚さんの居間の壁には仕掛けがあつて、其處から內證の一室へ行かれることとは、たゞ面白い話として人に言ひたいのは山々だが、それを言ふと、自分が深夜に和尚さんの居間へ忍び込んだことが知れる。一體煮賣屋の娘は、何んの用があつて、夜中にわざ〳〵寺へ來たのであらうか。それをハッキリとは知らない文吾であるけれど、またゑるッきり解らないのでもない。男……女……夜といふことが、文吾の幼い頭にも少しづつ判じがつきか〻つて來た。和尚さんは老人でも、男である。煮賣屋の娘は若い娘である。若い娘でも、文吾の眼には一人前の大人である。母と同じやうな大人だと思つてゐる。母が亡父の寢酒を求め歩いた果てに、平井明神の神酒を盜まうとした時、神の名を騙つて、母の手を捉へた白衣の男と母との關係は、丁度寺の和尚さんと煮賣屋の娘のそれと、同じ事であるまいか。平井明神は宵の口、

光明寺は夜中、たゞそれだけの違ひである――と此處まで考へて來た時、文吾の心は怪しく震へた。さうして自分も、もう一人前の大人になりかけたといふ氣がした。男　女……人間といふものが、どうしてこの二つに別けられてあるのか。自分は今まで少しもそれに就いて考へなかつた。これからはもう、羊羹どころぢやないぞと思つた。

家へ歸つてから、それとなく光明寺の怪しい室のことや、煮賣屋の娘が和尚さんに手を引かれて其の室へ入つたことを、晝間の話になほして、母に告げると、母は紡いでゐた糸車の手を止めて、

『滅相な、文吾はん。……あんたまア何んでそんなことを言ひなはる。嘘は盗人の始めといふが、……』と言ひさして、さめ〴〵と泣き出した。何んでまたこんなことで母が泣くのか、とそれが文吾には解らなかつた。

『嘘やない、わいが見たんやもん。』と、文吾は力を籠めて言つた。母を面白がらせようと思つたことが、母を泣かしてしまつたので、文吾は躍起とならずはゐられなかつた。

『あの活佛の光明寺さんに、そんなことがあつたら、天地がひつくりかへつてしまひますぞよ。』

と、母は短い兩袖で涙を拭きながら言つた。

『そやけど、わい見たんやもん。』と、文吾は自分よりも寺の和尚さんの方が、母に信用されてゐるのが殘念でたまらなかつた。

『それはあの娘が何んぞ用でもあつて、お寺へ行かつたんやろ。よれから其の壁のひツくりかへるところは梵妻部屋というてな、何處のお寺にもあるんやが、光明寺さんは其の部屋を使ふやうなお方やない。晝間やもんなア、あんたがそれを見たのは。……そんなことはない、あつてたまるもんか。』と、母は少し氣にかゝり出したやうであつたが、强ひて櫛卷きの首を振つてゐた。文吾は夜の話を晝になほしたばかりに、自分の言ふことが弱くなつたのを、またしみ〴〵と殘念に思つた。さうして、其の『夜』といふものに就いて、いろ〳〵と考へた末、自分もこれからは、其の『夜』といふものを自由に使はなければならぬと考へた。

十二

夏から秋になるのは早やかつた。寺へ通ふ路の傍に大きな御所柿が、今年は不作だといふ

ことで、ちらほらと枝の間に紅い實が見えるくらゐであつたが、其の代りに去年よりも一昨年よりも、ズッと大きく見事なものであつた。しかし文吾はもうそんなものにはあまり心を惹かれなかつた。もう少しよいものをと、文吾の鋭い重瞳の眼は、他の方を睨んでゐた。

秋と冬との間に、青地の村では、若い衆たちの伊勢參りの道中がある。それは五年目〳〵に行はれる村の行事で、伊賀から伊勢へ、さう遠くもないところを、ぐるッと廻はり道して往復七日がかりで、木遣り音頭を唄ひながら、白裝束に脚絆、甲掛け、菅笠に金剛杖といふ山登りの姿をして、ゆる〳〵と出かけるのである。鹿島立ちから參宮までは、戯談一つ言はずに、精進潔齋して行くが、下向の第一夜を古市の姫買ひに明かすのが、參宮よりもズッと大事な彼等の唯一の希望で、それからは次々の宿場に、飯盛りと戯れぬ夜とてもない、往きはよい〳〵復りはこはい疾を獲て、鼻のない顔を生涯、村に晒らしつゝ、有り難い記念を留むるものもあるけれど、そんなことは頓着なしに、若い衆たちは指折り數へて、五年目の『やアとこせ、よういやな』を待つのである。

文吾も、夏から其の伊勢參りの同行に加はりたくてならなかつた。それを母に言つても、『あ

れは子供の行くとこやない。』と、頭から顧みられないし、若い衆の頭に頼んでも、『ふゝゝ』と鼻の先きで笑はれてしまつた。

『行きたいなア、行きたいなア。』と、秋になつてから、文吾はそればかり考へて、もう御所柿でも、羊羹でもなかつた。

いよ〳〵鹿島立ちも十日の後に迫つた或る夕、文吾は昨夜見た伊勢參りの夢を想ひ出して、獨りぶら〳〵と杉の葉を吊した煮賣屋の前を歩いてゐると、向ふの方の路傍に立ち話してゐた五六人の若い衆が、手に〳〵文吾を招いた。伊勢參りの話ではないかと思つて、文吾は胸を躍らせながら、若い衆の群に近寄ると、其のうちの頭だつた一人が、一層近く文吾の耳を、胸にまで引き付けて、

『文吾はん、杉の屋の風呂の栓抜いて來て呉れんかい。俺等が行くと目立つさかい、お前なら丁度よい。早う〳〵。』と促し立てるやうに言つた。杉の屋とはあの煮賣屋のことで、今日は杉の枯葉が、青々とした新しいのに取りかへられてあつた。この家の風呂場は裏の方にあつて、栓が長く背戸の小溝の上に出てゐるのも、文吾はよく知つてゐた。

『厭やぢやい、そんなわるいこと。』と、文吾は大きな聲で言つて、首を振つた。

『しッ、しッ。……』と、手を振りつゝ若い衆は文吾の高聲を制して、『やい、や、わるいこッちやない、ちいとわけがあつて、あそこの風呂の栓拔いたらんならん、今、娘が入つてよるさかい、早ういて拔いて呉れ。賴む〳〵。』と、若い衆は神佛を拜むやうに、文吾の前に手を合はした。

『伊勢參りに連れていて呉れるんなら、あの栓拔いて來る。』と、文吾は若い衆の足元を見て言つた。若い衆は顏を見合せて困つた樣子をしたが、『よし〳〵、連れていたるさかい、早う拔いて來い。』と言ふと、皆々それに同じて、『早う、早う。』と急き立てた。

『騙すんなら厭やぢや。』と、文吾はまだ動かなかつた。

『騙しやせん。……早うして呉れ。お娘があがると何んにもならん。』と、若い衆は焦慮つた。

文吾は漸く駈け出して行つたが、覺え込んだ忍び足の法で、煮賣屋の人々の眼を晦ましつゝ、背戸へ廻つて、繁つた蓼のそろ〳〵枯れかけてゐる上へぬッと出てゐる竹の筒の栓を拔くと、後の世には自分が大人になつてからの名で呼ばるゝ五右衛門風呂の湯が、ちやアと噴き出した。

『あゝッ。……』と叫んで、娘が風呂から飛び出したところへ、若い衆の一人は急用でもある風をして、表から飛び込んで來た。あわてふためいて、何をする間もない娘のまる裸體が、稻妻のやうな若い衆の眼光に映つた。

『これぢや、これぢや、疑ひなしぢや。』と、煮賣屋から出て來た若い衆は、右の手で腹の膨れた形をして見せながら言つた。

『さア、これから相手の詮議ぢや。』と、年嵩の若い衆は言つた。

『伊勢參りに連れていて呉れるなア。』と、文吾も其處へ顏を出した。

十三

青地の村から出た伊勢參りの同勢八人のうちに、子供が一人居るといふことは、道中筋で人人の眼を集めた。

『あれや何んぢやい。あんなもん連れて行ッこる。』

『あんな小ッぺいにお女郎買ひが出けるやろか。』

憚り氣もなくこんなこと言ふのが、ちよい〳〵と文吾の小さい耳へ入るが、文吾はたゞニヤニヤと笑つてゐた。伊勢參りの願望の屆いたのが嬉しくて〳〵、人が何んと言はうとそんなことは構はないのである。

木遣り音頭の聲賑かに、殆んど村中の人殘らずに送られつゝ、隣り村の平井明神に參詣して、だん〳〵伊勢路へ向ふのであるが、其の時文吾の小ひさい身體は笑はれ通しであつた。先達の源右衞門さへ、時々後を振り向いては笑つてゐた。

何故そんなに可笑しいのか。それはこの頃この國のお伊勢參りが、古市の姫買ひを目的として、神信心は附けたりであつたから、子供の參宮をば、八十の老婆の嫁入りよりもまだ不思議なこと、可笑いことゝしたのである。先達を除いては、皆血氣の若者ばかり、六人のうちで四五人までは、この度の旅によつて、其の處女性を破らうとしてゐる。それまでは慎んでゐて、これからそろ〳〵といふのを、一生の誇りとしてゐる。後の世に行はれる神前結婚式……先づさうした嚴肅な意味に、お伊勢參りをば、性的の行動と觀るのであつた。元服の烏帽子親

を選ぶやうな心を、お伊勢參りの人がもつてゐた。

『あの人もえゝけど、まだお伊勢參りが濟まんよつてな。』と、村の娘たちは、伊勢參りに行かない若者を、幾分嘲笑の眼をもつて見た。處女の重んぜらるゝのは、いつの世でも同じことであるが、男の方でお伊勢參りの濟まぬものは駄目であつた。

出立の前夜、文吾の母は、いろ〳〵に心配して、先達源右衞門の家へ尋ねて行つた。嬉しさに包まれて、旅の支度をして居た文吾は、背戸を出て行く母の姿を見て、直ぐ源右衞門の家へ行くのぢやなアと覺つた。人の姿を見て其の行方を知るといふことは、文吾が忍び足の法とゝもに、此頃自得した一つの神經作用であつたが、大抵は誤らなかつた。あの人は何處へ行くといふことを知るのは、さうむづかしいことではないやうに思はれた。殊に母の場合には、それが手に取る如く分つた。

旅の支度に忙しいなかで、母の出て行く後姿を見送つた文吾は、にこりと笑ふと、直ぐ表から飛び出して、畦道傳ひに源右衞門の家へ先き廻りをした。

源右衞門の家は、中くらゐの百姓であるが、家柄は文吾の家の次ぎに位してゐた。文吾の家

は後家と子供とだけだから、村の寄り合ひの正座も奪はれてしまつたのであるが、源右衛門も家柄だけでは正座へなほることが出來ないで、成り上り者が幅を利かしてゐる不平を、酒に紛らしつゝ憤つてゐる。今年五十一になるまで、四度お伊勢參りの先達を勤め、大和の行者參りには八度も先達になつたのを誇りとしてゐる。

今度も、先達に講元を兼ねてゐるので、大きな藁家の傍に一坪ばかりの土地を淨めて、神籬を立て、八足の机を置き、新菰を敷いて、大神宮樣が祀つてある。文吾はこの神籬の中へ入つて、母の來るのを待つてゐると、察しに違はず聞き覺えの尻切れ草履の足音がした。さうして入口の敷居を跨ぐ影が薄く幽靈のやうに見えた。

文吾も直ぐ後から眞ッ暗な土間へ入つた。白い砂が疊のやうに美しく均らしてある神籬の中へ、若し土足を蹈み込めば、直ぐ腰が立たなくなると、村人は皆恐れてゐて、靈代を安置する平井明神の神主のほかは、誰も入るものがない。それを文吾は子供らしくもない好奇心から、神の罰で腰が拔けたら、明朝の出立も糠喜びになるのを忘れて、つひフラ〳〵と、神籬の中へ忍び込んだのである。しかし榊の枝がさら〳〵と袖に觸れて鳴つたゞけ、腰も拔けなければ、

跛足になることもなかつた、文吾はニヤ〳〵と笑つて、暗い土間に倒れてゐる鍬の柄に躓きもせずに、すうッと風のやうな足どりで、圍爐裡の切つてある板の間の前まで行つて蹲つた。

源右衛門は鹿島立ちの酒に醉ひ仆れて、榾の火にあか〳〵と顏を照らされながら眠つてゐた。文吾の母は、源右衛門の內儀と一言二言話してゐたが、うんと寢返りをした源右衛門を、內儀は「もし、もし」と呼び起して、「左衛門旦那のが、わせらッた」と告げた。

「これは、これは。」と源右衛門は眼を擦りつゝ起き直つた。亡き夫左衛門と、先祖との光りが見る影もない後家の上にまで輝いて、蔭では何んと言はうと、面と向つて文吾の母を侮るものはまだなかつた。

「御用なら、お人を下されば上りましたのに。」と、源右衛門は居住ひをなほし、胴服の襟を引ッ張りながら言つた。お人を下さるにも何んにも、母子二人切りの家では、どちらか一人が使に出るよりほかはなかつた。家柄よりも物持ちを貴ぶ風は、山城大和から此頃この伊賀の國へも吹き込んで、田地持ち山持ちが上座になほるのを憤つてゐる源右衛門には、態とらしく丁寧に文吾母子を扱ふ傾きがあつた。それは文吾母子を敬ふのは石川の家柄を敬ふので、石川の家

柄をもつた源右衛門が石川を貴ぶのは、また自分の家を村人から貴ばせようとすることになるのであつて、源右衛門の心は、こんな簡單なことに對して、甚だ複雜に働いてゐた。

『あのわるさがお伊勢參りするんや言うてきゝまへんので、若い衆も連れていて下りますさうで、いづれまア、あんたはんの御厄介や思うて、お頼みに參じました。あんな小ッこいもんが色事も存じまへんでへうし、皆さんの足手纏ひになるやらうと思ひますと、お氣の毒さんで……』と、母は早口に言つて、萎びた手を圍爐裡の火に翳してゐた。

色事の二字に、文吾はハッとして首を傾けた。光明寺の夜の不思議と、路傍の煮賣屋の風呂の栓と、この二つの新らしい事件は、文吾の幼い頭を搔き亂して、何やら其處に物があるやうな氣がしてゐた。お伊勢參りがしてみたいといふ心も、これが爲めに一層強くなつたのだといふことは、自分にもよく分つてゐる。

『お伊勢參りに子供を連れて行くのも、楽しみなもんぢやらうと思ひましてなあ。……』と言つてニヤ〳〵笑つてゐるたけで、源右衛門は別に何も言はなかつた。母はもつと言ひたいことや頼みたいことがあつたらしかつたけれど、親の口から出しにくい言葉だと見えて、もじ

もじして言ひそゝくれたまゝ歸つてしまつた。

『可哀さうに心配してらるなア。』と、源右衛門は內儀を顧みて、矢張りニヤ〳〵しながら言つた。文吾は呆氣ないやうな氣もしたが、色事の二字を、仔細に胸の裡で考へつゝ、また風のやうに源右衛門の家を飛び出すと、先き廻はりして母よりもズット早く自分の家へ戻り着くなり元の樣子で旅支度のものを弄つてゐた。

さうして、翌日の出立に、源右衛門の家の勢揃ひへ眞ッ先きに行つたのは文吾で、白衣の脚絆甲掛けの姿が可愛らしかつた。

『妙ちや、妙ちや、妙ちきりんぢや。あれ見い、子供の伊勢參り。……』と、道中の何處でも囃し立てるやうに呼ばれた。全く其頃この土地では、お蔭參りの時のほか、子供の伊勢參宮が、それほど珍らしかつたのである。伊勢參りといふことが、妙な意味に取られる伊賀あたりの風儀であつた。

十四

伊勢參りから歸つた文吾は、小さい身體が急にめき〳〵と、筍のやうに伸びるやうな氣がした。

『俺はもう子供でないぞっ』と、人に向つて威張りたくなつた。

『あの坊んち、どないしまんね。殺生なことしやはつて。……』と、古市の油屋で、先達の源右衞門が赤い前垂の女に叱られるやうな物の言ひやうをされてゐるのを、文吾は恐ろしいやうな、可笑しいやうな氣持ちで聞いたのであつた。

『何んでもえ〻、店の法通りにして呉れ。』と、旅慣れた源右衞門も、少し困つた風で、役人の前へでも出たといふ形をして言つた。六人の同行は、そら來たとばかり、待つてゐたらしい顏をして、面白さうに眺めてゐた。

やがて文吾唯一人のところへ、衣摺れの音とゝもに現はれたのは、母を少し若くしだほどの女であつた。

『坊んち、泣かんやうに、よう遊びなはれや。』

其の女は、前で結んだ美しい帶を、白い手で撫でながら、かう言つて、莞爾と笑つた。其の

顏には小皺が多くて、ツンと高い鼻の側面に一かたまりの菊石が、つくねたやうになつてゐた。其の菊石の上の白粉は殊に濃くて、美しい帶を撫でてゐる手の甲にも白粉の痕が見られた。

白粉の化け物！　さう思つて文吾は、睨むやうに其の女を見詰めた。さうして、一つ驚かしてやらうかと考へてみたりした。

『坊んち、何んにも怖いことあれへん。わたしがよう遊ばしたげるがな。……何んぞ手遊品持つて來たらよかつたなア。』と言つて、女が四邊を見廻はしてゐるうちに、文吾は例の忍び足の法で、窓然女の前から姿を隱した。

『あゝ、坊んち、何處へ行かはつた。』と、女は白粉の顏をあげて、きよろ〳〵した。文吾が隅の屏風のところから、ぺちや〳〵と手を叩くと、女もぽん〳〵手を拍つた。文吾の手はよく鳴らないが、女の手は表へ聞えるほど朗かに響いた。

『そんな手の鳴らしやうではあかん。』と言ひさま、女は文吾に飛びかゝつて、其の手を自分の手に持ち添へつゝ鳴らさうとしたが、四つの手が一つになると、兎てもうまくは行かなかつた。

『この子、妙なことをする子やなア、氣味がわるい。』と言つて、女の手は固く文吾の手を握つ

た。それを振り離して、火桶の縁を一つトンと叩くと　文吾の姿は、また女の眼から消えてしまつた。

『ポン、ポン。ポン。……』

今度は女の方から、迷子でも探すやうにして、一層朗かに手を拍つた。

『ペチヤ、ペチヤ、ペチヤ。……』

文吾の小ひさな手は、女の直ぐ前に、小兎が餅でも搗くやうな音を立てたと思ふと、其の呑まれたやうに大きな丹前を着た姿が、元の通り火桶を前にして坐つてゐた。

『この子はまア、可愛らしいと思うてたら、怖いらしいわえ。……』と、女はさも〳〵感心したやうに言つた。

其の頃ポルトガル國から初めて渡つて來たタバコといふもの〻烟りを、大きな灰皿の附いた管で、ズバ〳〵吸ふことを、この古市あたりの女は少しづつやつてゐた。伊賀の奥から出て來た文吾は、それが珍らしくて、女に教はり〳〵、火を點けて貰つたのを、一口吸ひ込んだが、駄やにいがらつぽくて、眼を白黒にして咽せ返つた。女はよく鳴る手を拍つて笑ひこけた。

『さいぜんの敵打ちや、あんたは伊賀の山椒賣りの子や思うて、侮つてたら、えらいことしなはつたなア。そやけど、タバコには降參だすやろ、兜脱ぎなはれ。』と言ひ〳〵、女は文吾に摺り寄つて來た。

『わつはゝゝゝ。……』

次ぎの間に大きな笑ひ聲が聞えたのは、源右衛門を始め、同行の若い衆たちで、先刻から様子如何にと、次ぎの間へ來て窺つてゐたのであるが、襖の隙から覗いたものが、こらへ兼ねて大きな聲で笑ひ出したのに和して、五六人かどつと一時に笑つた。

羞かしいといふことを、文吾は其の時初めて知つた。今までの恥かしいといふ心持ちとはまるで異つた羞かしさ！　そんなものがこの世にあることを少しも知らなかつたのだから、全く文吾には或る世界の夜が明けたやうなものであつた。

浮世の夜はだん〳〵更けて行くのに、文吾の夜は明けかゝつた。まだ固い寒梅の蕾が一夜の南風に綻び初めるやうなものであつた。

『おうい、邪魔すなやい。後家さんに頼まれて來たことがあるんちや。』

醉ひしれた源右衛門の千鳥足が、廣い廊下に響いて、文吾の小さな座敷を覗く同行たちを叱り飛ばす聲が聞えた。

ほんたうに浮世の夜が明けるのは、秋のことゝて、長いことであつた。それを長いとも短かいとも、文吾は一切夢であつた。浮世の夜が明けて、文吾の夜も全く明けた。文吾はたゞぼんやりしてゐた。其の小ひさい背中をば、女が輕く叩いた。

『何考へてなはる、坊んち。』と、言つた聲は、文吾の耳に滲みた。

『山吹さん。……』と、文吾は大人のする大きな枕に押し付けてゐた耳へ、よく覺え込んでゐた女の名を、改めて呼んでみたが、何も言ふことはなかつた。

『はい。……』

『……』

『何んです。……何んとか言ふとくなはれ。』

今日はもう山吹に別れなければならないのかと、文吾の悲んでゐるところへ、源右衛門は頓に若返つた五十面を、朝酒にほんのりさせて、入つて來た。

『石川の坊んち、今日も流連や、幸ひ雨になりさうで、結構なこつちや。』と、丹前姿で突つ立つたまゝ言つた。

『おゝ、嬉しい。……』と、山吹が魁けて欣んだ。流連の意味が文吾にはよく解らなかつたけれど、雨が結構ぢやと言つた源右衛門の言葉と、女の嬉しさうな顏とから推し測つて、文吾もぞく〳〵と嬉しかつた。

十五

古市二日といふ村の伊勢參りの掟を破つて、三日も流連したので、日取りの狂ひは後の道中で取り返へすから、下向の迎ひを平井明神の境内に待ち惚けさせる心配はないが、苦勞なのは、めい〳〵の懷中であつた。源右衛門は、講の積み金を持つて出たのだけれど、それは今までの旅籠賃と、御師への禮物と、大神樂の奉納とに、あらかた使ひはたして、幾らも殘つてはゐない。

どうしてもこれは、村から呼び金をするよりほかはないが、其の使には誰が立つ。同行八人

が一室に集り、女を退けての評定が、三日目の辰の刻に始つた。伊勢から伊賀へほんの隣り國ではあるけれど、古市は東南へ寄つてゐるので、達者な足で、久居から林へ抜けて、上野へ出ても、一日ではとても行かれない。二十里あまりの道程を、往復七日がかりの參宮は、氣樂過ぎる道中だが、今日往つて明日金を持つて復るといふのは、少しむづかし過ぎるので、誰れも彼れも、この使は尻込みするのが當然であつた。

さういふ時には、きつと籤にしようといふことになるのを、この時は小さい文吾が言ひ出すまで、皆忘れてゐた。

『負うた子に教へられて淺瀬を渡る。』なぞと呟きながら、源右衛門だけを抜きにして、源右衛門が籤を拵へた。一番長いのを抽いたものが、金の使に立つといふ定になつた。

『何んぼ先達でも、源右衛門さんが抜けるのは、ちつとすこいなあ、源右衛門さんを入れて、文吾はんを抜いたらえゝ。』と、言ひ出したものがあつた。

『成るほどさうぢや。こんなもん籤に當つたかて、使に行かれへん。よしんば行けても、金の工面が出けへへん。』と、合槌を打つものがあつた時、文吾はカッと怒つた。

『こんなもん……とは、何んぢやい。使に行かれんか、金が出けんか、やらしてみてから言へ、くそ垂れめが。』と叫んだ文吾の小さい口からは、火を吐きさうで、唇は眞ッ赤に燃えたやうであつた。

『俺はもう大人ぢやぞ。』

更にかう文吾が叫んだ時、一同は噴き出した。文吾にくそ垂れめがと罵られたものも、共に笑つてゐた。

『籤なんぞ引かんかて、俺が其の使したる。』と、文吾はいよ〳〵威丈高になつた。

『まア〳〵。』と、源右衛門は、さながら若い主人を宥める家老のやうにして、文吾のいきり立つのを押へながら、最初の定めの通り籤親の自分だけが抜けて、一同に紙捻の籤を抽かした。

『どうれ、俺が一番長いのを引いて、使にいたろ。金もドッサリ持つて來たるぞ。』と、文吾は一晩のうちに聲變りがしたのか、大人のやうな調子で言つて、眞ッ先きに源右衛門の節くれ立つた手にある白く細い籤を摘まんだ。

文吾には、どの紙捻が一番長くて、どれが短いといふことがよく分つてゐた。どういふもの

で分るか、それは文吾も知らないが、兎に角、源右衛門の汚ない握り拳を透いて、中の紙捻が、ギヤマンの鉢に浮く慈姑の根のやうに見えてゐた。

七人の親指と食指とが、皆源右衛門の拳の上に集つたところで、源右衛門は『よしか』と一聲、パッと指を開くと、七つの手に一本づつ紙捻がブラ下がつた、比べて見ると、成るほど文吾のが一番長かつた。

『さア、俺が使に行く。金もドッサリ持つて來てやるぞ。』と言ふなり、文吾は山吹の部屋へと長い廊下を躍る風にして行つた。後に七人は、金魚が水を吐くやうに、ぽかんとして、顏を見合はせてゐた。

暫くしてから、源右衛門が、氣がかりでたまらないといふ顏をして、山吹の部屋へ來た時、源右衛門の眼には、女が唯一人立て膝をして、長い煙管の瀬戸物の吸口から、頻りに烟を吸つてゐるのだけしか見えなかつた。

『坊んちはもうお立ちだしたで。何んやら急な用やいうて。』と、白粉の斑になつた口元に微笑を寄せつゝ、女は言つた。其の背後の屏風の蔭に文吾の立つてゐるのを知らずに、源右衛門は

いよ〳〵心配さうな顏をして、腕組みをしながら、山吹の部屋を出て行つた。朝酒もスッカリ醒めたらしく、舌を吐いて文吾の覗く丹前の後姿を、松風が冷たく撫でてゐた。

『バア。』

廣い廊下を己れの部屋へ入つた源右衛門の後姿を見屆けてから、文吾は山吹にかう言つた。

『可愛うて、仕樣のない子やなア。』と、山吹は溜息ともゝに、撫で肩を窄めつゝ言つて、莞爾と笑つた。

十六

日が暮れかゝる頃、文吾は、源右衛門を始め、同行のものにはもとより、廣くて多い油屋中の男女にも餘り知られないやうに、忍び足の法で往來へ出ると、直ぐ他の遊女屋へ入つて行つた。廊下や部屋の樣子は、油屋で呑み込めてゐたから、ズン〳〵入つたり廻はつたりして、鏡臺や手匣の類を撥き探がした。忍び足の法が、こんなにまで人に氣附かれないで、役に立つものかといふことは、文吾自身にさへ驚かるゝほどであつた。人が來れば、壁……襖……

……屏風……何んでも、有り合はしたものに寄り添うてさへゐれば、それで先方は氣付かずに行く。壁に近付けば壁と同じやうになるし、襖にぴつたり身體を押し付けてゐれば襖の繪にでも見えるのか。曲折のある屏風は身を忍ぶに最も屈强のものであつた。

しかし、幾ら部屋々々を探して歩いても、お金を貰ふことが出來なかつた。仕方がないから、珊瑚珠、碼瑙、水晶なんぞ、玉ばかりを多く貰つて、お金はほんの少しばかり。これでは足りないであらうと思ひながら、油屋へ戻つて來た。部屋へ入つて見ると、山吹は居なかつたから貰つて來たものを殘らず出して、疊の上へ並べて見た。

文吾の心には、貰ふといふことゝ、盗むといふことゝの間に、隔ての障子が立てられてゐなかつた。村で御所柿を貰うた時からさう思つてゐる。人間が尠うて品物は多い。人間が殖えて行くよりも品物の殖える方が早い。欲しいといふものが皆貰へたら、誰れも欲しがるものはない。さうしないで、こんなところに珊瑚や瑪瑙を、五つも六つも隱して置くから、持つてゐないものが欲しがるのだ。まアこれを皆貰ふて行けと、懷中へ押し込んだ時、肌が冷りとした。

待てよ、こんな玉は貰うても喰へない。肌に着けたとて、何んの藥にもなるものではない。

それをどうして人が欲しがるのか。文吾の智慧はなか〳〵急に其の謎を考へ付くことが出來なかつた。

あゝ分つた。こんな美しい玉は、柿や栗や米や麥や粟のやうに、さうドッサリあるものではない。世界中にあるのを、海の底に生えてゐるのまで、皆持つて來たら、總べての人に一つ宛こんな珊瑚の玉一つぐらゐ行き渡らんこともあるまいが、誰も皆持つてゐては値打ちがない。同じやうに裸體で生れて來た人間に、外から値打ちを附けやうと思ふて、こんな玉を拵へよつた。さうして態と其の數を尠うして、誰れでも手に入れることが出來ないやうにして置く。猾い奴ぢや。こんなものは、貰うてやるに限る。

紺屋の職人がどうにでもして勝手に染められる色にさへ値打ちを附けて、光明寺の和尚さんはまだ赤い法衣が着られないと言つてゐた。阿呆め、物の色はお天道さまの光で、いろ〳〵に見えるのだ、人間の眼の加減で、赤いとか青いとか紫だとかになるまでぢや。そこにこれは俺の色だ。ほかのものは赤い法衣を着ることならんといふのぢやもの。人の物とか我れの物とかいふのは、一番分らん話ぢや。赤い色は許さぬぞよと威張つてみても、御所柿の實が自然に

赤く染まるのを、將軍樣だつてどうすることも出來ぬぢやないか。烏瓜の實は大僧正の緋ごろもよりも赤いぢやないか。阿呆め。駒鳥の胸は、御領主樣の緋緘の鎧よりも綺麗ぢやぞ。

御領主の富田樣から、お布令が出た。あのお布令といふものが、自體氣に喰はぬ。村總體を一つの同じお布令で縛らうとしても、太いものがあつたり、細いものがあつたりして、工合よう行くものか。人間一人にお布令一つ宛別々でなけれや、ほんとには行かん。ほんと〻言つても御領主樣の役人が考へてゐるほんとは、ほんとのほんとぢやない。俺は叱るお布令と源右衛門さんを叱るお布令と同じことでは、キツシリ行くものか。源右衛門さんにはお内儀があつて子を產んだらお芽出たうと人が祝ふけれど、光明寺の和尙さんが、女子を引つ張り込むのは極内ぢや。養實屋の肥えた娘のことは、俺のほかにまだ誰も村で知るものがないけれど、あれが和尙さんの子を生んで、若しそれが知れたら、えらい目に遭ふのは和尙さんであらう。同じことをしても、源右衛門さんなら芽出たうて、和尙さんなら惡い、といふ理窟が立つなら、御領主のお布令は、村方の人間一人〳〵別々に、一つ宛拵らへて貰はねばならぬといふ理窟も立つ。人間が誰れでも蹈んで歩けて、蚯蚓やけらが自由に棲んでゐる土地へ、勝手に縄張りをして、

これは俺のものぢや、と言つてゐるのも可笑しいが、海の底から拔いて來たものを、こんな玉にして、これは俺のぢや、俺よりほかにこんな見事なのは滅多に持つてゐるものがないぞ、とひけらかしてゐるのも阿呆ぢや。

こんなことを、文吾は獨りで考へながら、大きな赤い玉を一つ取つて、疊の上にころ〳〵と轉がしてみた。

其の時廊下に、山吹らしい足音が、パタ〳〵と響いたので、文吾は周章てゝ、數々の珠玉を押し隱しながら、

『俺は矢ッ張り、惡いことをしたのかなア。……』と思つて、胸を抱いた。

廊下の足音は山吹でなくて、源右衛門さんであつた。あんまり心配して、歩きつきがひよろひよろと女のやうになつてゐた。

『もう、いておいなはつたのか』と、源右衛門さんは驚きの眼を瞠つた。

『もう、いて來ました。……お金はこれだけ、これは家の阿母さんに貰うて來ました。貰つてお金にして、餘つたのを持つて戻れというてだした。』と、文吾は平氣な顏をしてお金と玉

とを出した。

源右衛門を始め、同行は皆どうも怪しいと思つたけれど、偖文吾がどうして金と玉とを手に入れたか、見當の附けようもなかつた。さうして、背に腹はかへられぬので、數々の珠玉を源右衛門が松坂の町へ持つて行つて、お金に換へて來た。其の金は油屋の支拂ひをして、まだドッサリ餘つた。それが皆文吾の懐中に入つた。

翌朝の出立に、文吾は突然、『あッ痛ッたゝゝゝッ。』と腹を押へて、山吹の膝に倒れかゝつてしまつた。

八人の同勢が七人になつて、村へ下向の途に就いた。

歴史物傑作選集 第五巻『西行法師』終

大正十四年一月二十日印刷
大正十四年二月廿日發行

歴史物傑作選集
『西行法師』
定價一圓八十錢

著者 上司小劍

發行者 東京市麻布區青山南町三ノ五五 面家莊佶

印刷者 東京市神田區佐久間町三ノ一九 北島三作

印刷所 東京市神田區佐久間町三ノ一九 三洋印刷株式會社

發行所 東京市青山南町三ノ五五 株式會社而立社
電話青山五七六
振替東京六二二五六

K22A-74

歴史物傑作選集

菊池　寛著『名君』既刊

芥川龍之介著『報恩師』同

長與善郎著『エピクロスの快樂』同

武者小路實篤著『釋迦と其弟子』同

佐藤春夫著『李太白』同

上司小劍著『西行法師』同

山本有三著『題未定』近刊

谷崎潤一郎著『題未定』同

以下續々發行　回定價各一圓八十錢・送料各十二錢

東京・而立社・青山

終